河北町埋蔵文化財調査報告書第４集

K-688

花ノ木遺跡

発掘調査報告書

2001

河北町教育委員会

花ノ木遺跡

発掘調査報告書

平成13年3月

河北町教育委員会

序

本書は、花ノ木工業団地造成工事に伴い、平成９年度と１０年度の２か年にわたり、河北町教育委員会が実施した「花ノ木遺跡」の発掘調査の結果をまとめたものです。

花ノ木地区は河北町の北部に位置し、法師川から緩やかな傾斜面になっており、その中を国道３４７号が走っております。『山形県遺跡地図』（昭和５３年　山形県教育委員会）にも「花ノ木遺跡」として登録され、古くからよく知られた遺跡であり、昭和３１年、３４年の発掘調査と３５年の開田作業中の遺物の発見によって、縄文時代晩期から弥生時代初頭の遺跡であることが確認されました。しかしながら、その際に正式な調査報告書は出されませんでした。

平成４年の範囲確認の試掘調査では、団地造成計画地までは包含されないとされていましたが、団地造成工事が進んでいく中、造成地域内から遺物の出土が確認されたことから、平成９年に文化財保護の立場から河北町埋蔵文化財調査委員会を組織し、緊急発掘調査を実施することになりました。

河北町は山形盆地の一角にあり、最上川と寒河江川に囲まれ、町の北部には「花ノ木遺跡」をはじめとする多くの縄文時代の遺跡が存在し、古代の集落が数多く点在しており、豊かな自然に恵まれた生活環境にあったと思われます。

「花ノ木遺跡」は、出土した土器や遺構から、縄文・弥生時代が接触した文化がみられる貴重な遺跡であり、その近くからは石刀・石包丁・石斧など稲作に用いられたと考えられる石器類も発見されています。

近年、開発事業が進むにつれて、埋蔵文化財の保護の観点から、その調整について難しさが増してくると思われますが、先人の文化に触れることは、ロマンの追求であり、河北町は“歴史と文化の薫るまち”として、今後も先人が残したこれらの遺産の保護に努めて参ります。

最後になりましたが、この調査に当たりご指導ご協力を賜りました関係機関及び関係各位に心より厚くお礼申し上げます。

平成１３年３月

河北町教育委員会
教育長　後藤貞義

例　　言

1　本書は、花ノ木工業団地造成工事に係る「花ノ木遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成９年度、平成10年度の２か年にわたり実施した。現地調査期間は以下のとおりである。

平成９年度調査　平成９年７月28日～平成９年12月11日

平成10年度調査　平成10年４月20日～平成10年10月28日

3　調査の要項は下記のとおりである。

遺 跡 名　　花ノ木遺跡　　遺跡番号４４８

所 在 地　　山形県西村山郡河北町大字吉田字花ノ木

調査主体　　河北町教育委員会

調査体制　　河北町埋蔵文化財調査委員会

委 員 長　菊地隆三（河北町文化財保護審議会会長）

副委員長　槙　清哉（河北町文化財保護審議会副会長）

副委員長　北畠教爾（河北町文化財保護審議会委員）

委　　員　高橋郁夫（日本考古学協会会員）（主任調査員）

委　　員　宇野修平（日本考古学協会会員）

委　　員　浅黄喜悦（河北町文化財保護審議会委員）

委　　員　長南憲一（山形考古学会会員）（調査員）

委　　員　建部真也（学識経験者）（調査員）

調査協力員

奥山良三、藤野八重、茨木とよ子、軽部信一、深瀬順子、庄司栄一、門脇正孝、阿部利春、奥山ヒデ、長谷川義子、丹野恵美子、(社)河北町シルバー人材センター会員のみなさん

調査補助員

今田史明（河北町教育委員会社会教育課文化財係主事）

事務局

河北町教育委員会社会教育課

社会教育課長	後 藤 金 也（H９年度）
〃	阿 部 大 策（H10年度）
〃	和 田 富 男（H11年度）
〃	日下部 利男（H12年度）
課長補佐兼文化財係長	齋 藤 文 夫（～H11年度）
文化財係長	阿 部 葉 子（H12年度）
文化財係主事	今 田 史 明（H９年度～）

4　本調査にあたっては、次の方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

山形県教育庁文化財課、財団法人山形県埋蔵文化財センター、川崎利夫、
（社）河北町シルバー人材センター、河北町土地開発公社

（順不同、敬称略）

5　本報告書の作成・編集は作業員・事務局員の協力を得ながら、今田史明及び河北町埋蔵文化財調査委員会が担当した。

6　出土遺物、調査記録類については、河北町教育委員会が一括保管している。

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次のとおりである。

ＳＫ・・・土壙（どこう）	ＳＴ・・・竪穴住居跡（たてあな）	ＳＢ・・・掘立柱建物跡（ほったてばしら）
ＳＤ・・・溝跡	ＥＰ・・・遺構内柱穴（ちゅうけつ）	ＳＰ・・・ピット
ＥＬ・・・カマド	ＲＰ・・・土器・土製品	ＲＱ・・・石器・石製品
Ｓ　・・・石		

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は次のとおりである。

（１）遺構・遺物実測図は、各挿図毎にスケールを付した。

（２）遺物図版については、１／３の縮尺を基本としたが、一部については任意の縮尺である。

（３）遺物は抽出した主なものだけを掲載した。また、縄文時代の土器及び石器については写真と表のみの掲載とした。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
　1　発掘調査に至るまでの経緯 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の概観 …… 4
　1　遺跡の立地と環境 …… 4
　2　遺跡の層序 …… 5
Ⅲ　検出された遺構 …… 9
　1　遺構の分布 …… 9
　2　竪穴住居跡（ＳＴ）…… 9
　3　掘立柱建物跡（ＳＢ）…… 17
　4　土壙（ＳＫ）…… 18
　5　溝跡（ＳＤ）…… 18
Ⅳ　出土した遺物 …… 21
　1　縄文土器 …… 21
　2　弥生土器 …… 21
　3　古代の遺物 …… 21
　4　土偶・土製品 …… 21
　5　小玉及びその他の出土遺物 …… 21
　6　石器・石製品 …… 22
Ⅴ　まとめ …… 31
　報告書抄録 …… 32

表目次

表－１　出土遺物一覧表（１）…… 27
表－２　出土遺物一覧表（２）…… 28
表－３　石器・石製品一覧表 …… 29

挿図目次

第１図　遺跡位置図 ・・・

Ⅰ　調査の経緯

1　発掘調査に至るまでの経緯

花ノ木遺跡は、昭和３１年と昭和３４年に、山形大学の柏倉亮吉教授を中心として発掘調査が行われた。河北町周辺の遺跡など考古学の研究に熱心であった後藤三朗氏らも参加して行われ、縄文時代晩期から弥生時代初頭の遺跡であることが確認された。出土した遺物など花ノ木遺跡については、後藤氏の『河北町及び周辺の原始文化』（１９５７年刊）に紹介されているが、正式な調査報告書は出されなかった。

平成４年には、花ノ木工業団地造成工事に伴い、遺跡の範囲確認のための試掘調査が行われた。その結果、遺跡は昭和３０年代に調査した範囲よりも少し広がるとしたが、団地造成地までには広がらないのではないかと推定するに至った。

しかし、造成工事が進んでいく中、平成８年６月に、造成地域より遺物の出土があることが確認され、緊急に発掘調査を実施することになった。その結果、多くの遺物が出土した。さらに、遺物の範囲を確認するためのトレンチ掘り、同年１１月には１ｍ×１ｍの試掘区５４箇所を掘る試掘調査を実施した。その結果をもとに、遺跡予想範囲を調査区として設定し、平成９年より緊急の発掘調査を実施することになった。河北町教育委員会では、文化財保護の立場から、より良い調査が進むように河北町埋蔵文化財調査委員会を組織し、記録保存を目的とした緊急発掘調査となったものである。

2　調査の経過

調査は平成９年度と１０年度の２か年にわたり、約２,９００㎡を調査対象としている。調査区を含めた地域に４ｍを単位とするグリッド（Ｇ・方眼状の地区割り）を設定し、地点の高さを記録するための基準点を設けた。グリッドを構成するＸ軸、Ｙ軸の交点には、目印となる杭を打込み番号をつけた。また、調査区の北半部、南半部のそれぞれに東西、南北に交差する土層観察用のベルトを設定し、調査区を区割りした。

平成９年度の調査は、Ｙ＝３０グリッドまでの調査となった。７月１７日から準備作業に入り、７月２８日に現場での調査を開始した。重機で耕作土などの表土を取り除き、グリッドの交点に杭を打ち記録の目印とした。それから人力で地面を少しずつ掘り下げる作業（面整理）を何回も繰り返しながら、土の質や色合いの変化を手掛かりに遺構を検出する作業（遺構検出）を行った。遺構は黄褐色の地山の土に暗褐色や褐色などの土で残されている。こうして検出された遺構に番号を付け、検出地点、配置、高さなどを図面などに記録した。その後、遺構の半分、または中央にベルトを残して、どのように土が堆積しているかを観察しながら慎重に掘り下げ、図面などに記録した。記録は図面だけでなく、常に写真撮影も行った。このような作業で出土した遺物は、記録しながらグリッドや遺構毎に取り上げ、重要なものについては番号を付けて取り上げた。

１１月１８日には、調査の成果として調査説明会を現地で開催して多くの参加者を得た。

現地の調査は、記録などの作業や遺跡範囲確認のトレンチ掘りを続けながら、１２月１１日で終了し、同日に器材撤収を行った。

平成１０年度は、９年度の調査との連続性をもたせるためグリッドを構成するＸ軸、Ｙ軸をそれぞれ南方に拡張するように設定し、交点に杭を打ち番号を付けた。４月８日から現場での作業（準備作業）を開始し、４月２０日には安全祈願式を行い現地調査を開始した。現場においては、浸水や暗渠埋設に注意をはらいながら表土を剥ぎ、面整理、遺構検出、遺構精査、記録などの作業を進めた。

水が湧きでたり、大小の礫が広くあったりして作業に困難な部分もあり時間を要したが、調査の成果を地元の方々や関係者に知っていただくために、９月２９日に調査説明会を現地で開催した。

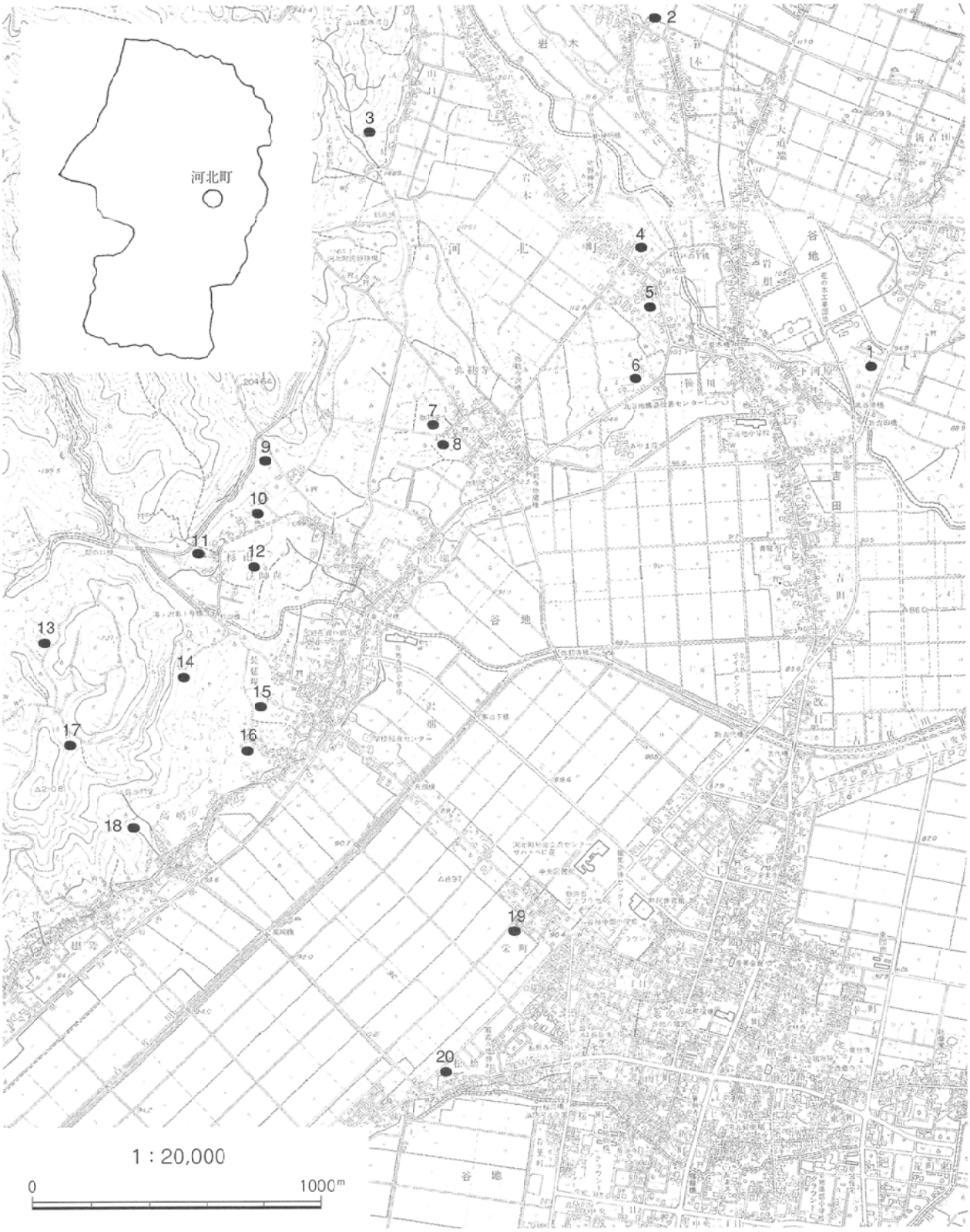
その後、遺構精査や遺物の取り上げ、記録等の作業を続けて、１０月２８日に現地の調査を終了した。

表土除去

面整理

遺構精査

記録作業



1　花ノ木遺跡（縄文晩期・弥生）
2　笹本遺跡（縄文）
3　岩木観音遺跡（縄文）
4　岩木B遺跡（縄文前・中期）
5　岩木A遺跡（縄文中期）
6　四ツ塚遺跡（縄文中期・平安）
7　弥勒堂遺跡（平安）
8　弥勒寺経塚遺跡（室町）
9　山の神遺跡（縄文前期（？））
10　焼林遺跡（縄文）
11　定林寺跡遺跡（室町～江戸）
12　法師森遺跡（旧石器・弥生）
13　鶴狭間遺跡（縄文中期）
14　慶光寺下遺跡（縄文中期（？））
15　お月山遺跡（縄文中期・奈良）
16　桑ヵ原遺跡（縄文中期・古墳）
17　慶光寺A遺跡（縄文前・中期）
18　毘沙門山遺跡（縄文・平安）
19　所岡遺跡（奈良～平安）
20　若宮八幡遺跡（奈良～平安）

第１図　遺跡位置図

Ⅱ　遺　跡　の　概　観

1　遺跡の立地と環境

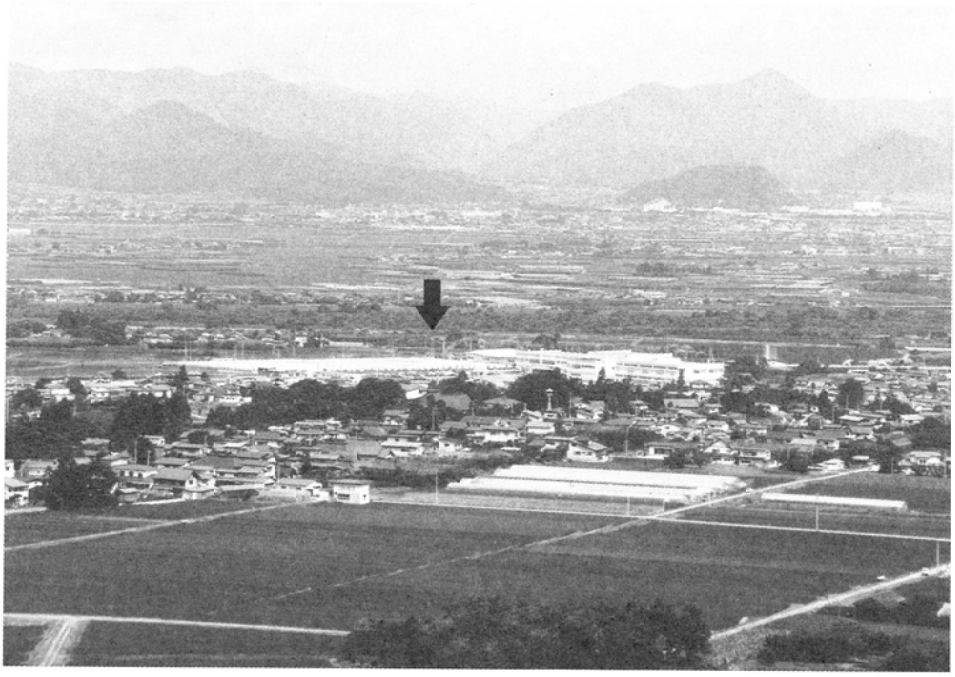
花ノ木遺跡は、山形県西村山郡河北町の北部に位置し、国道３４７号の東側と谷地より新吉田へと向かう町道の西側に面している。谷地から新吉田へ向かうと、集落へ右折してすぐに法師川にかかる橋があり、緩やかな傾斜面になっている。

河北町の西半は、出羽山地の東の縁にある葉山から延びる低い山地で占められ、東半の平地は、寒河江川のつくった扇状地のほか、法師川、古佐川、滝ノ沢川などが山地から削り取った大量の土砂が厚く積もった扇状地により形成されている。南から北に流れる最上川に区切られるまで一面の平野が広がり、山形盆地の一角をつくっている。

山地から平地に変わる麓に沿い、古くから箕輪、両所、根際、沢畑、弥勒寺、岩木、さらに湯野沢、岩野などの集落が形成されてきた。これらの集落の背後は陽当たりが良く、見晴らしの良い丘の上や傾斜面に、縄文時代から古代の遺跡が数多く点在している。

花ノ木遺跡は、法師川が形成した扇状地の扇端近くの微高地に立地している。標高は約９０～１００ｍで、法師川の左岸の自然堤防・微高地上に位置し、南東に緩く傾斜している。昔は農作業中に石器や土器片を拾えたと伝えられている。

遺跡の周りは湧水が豊富で、昭和３０年代の基盤整備により開田されるまで、遺跡のある微高地を取り巻くように「古田」があり、原始の時代には沼沢地だったと考えられる。水鳥や水を飲みに来る小動物を捕らえ、法師川や最上川で採れる鮭や川魚、近くの山や野から木の実などの食料を採集でき、南、東に開け陽当たりの良い、生活するには良好な場所だったと思われる。縄文時代や弥生時代には恵まれた生活環境にあったと考えられる。



調査区遠景

2　遺跡の層序

全体として法師川や開田事業の影響が大きく、複雑に入り組み撹乱されている部分があり、安定した面を把握しにくいのが実状である。第２図は調査区北半部西ベルトで（２６，２２）Ｇ～（２８，２２）Ｇの南側壁の土層を実測したもので、これをもとに遺跡の基本層序を述べる。

第Ⅰ層　褐色砂質土

Ⅰa 褐色砂質土

（粒状礫が所々わずかに混じる。下層に薄く赤さびた酸化した根の痕があり、Ⅰbと分かれる。　耕作土・表土）

Ⅰb 褐色砂質土

（粒状の礫がわずかに混じる。下層に酸化鉄の赤い色がぼんやり見られる。耕作土・表土）

第Ⅱ層　褐色砂質土

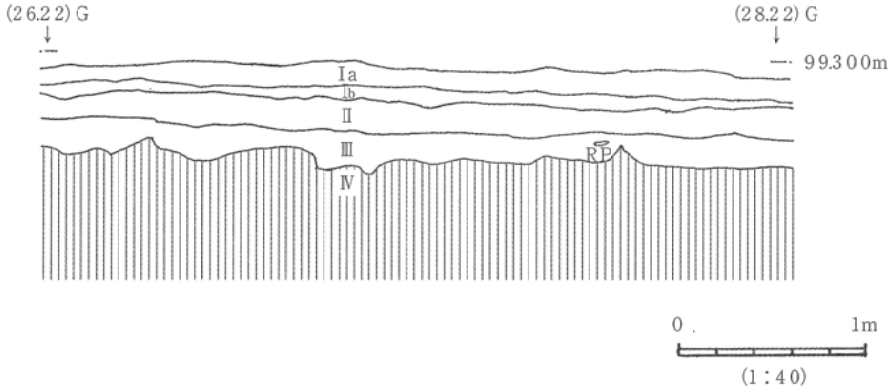
（わずかに黄色い細かい礫が混じる。Ⅰ層よりやや暗い。　表土）

第Ⅲ層　暗褐色砂質土

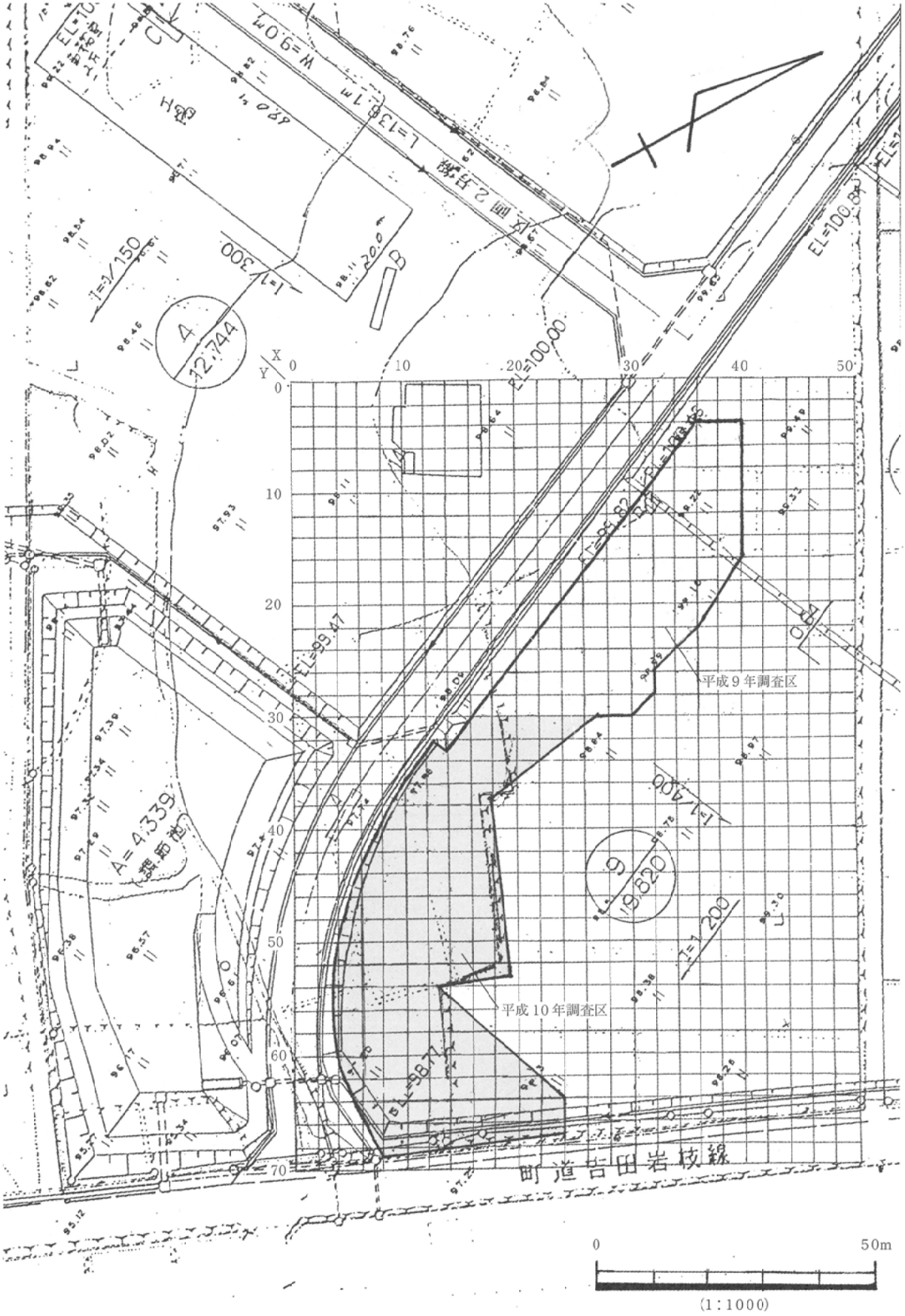
（土器片を含む。　遺物包含層）

第Ⅳ層　黄褐色砂質土

（少し粘性あり。　地山）



第2図　遺跡層序断面図



第３図　調査区概要図

黄色細砂
SK28
ST105
川原石集積
ST130
ST380
SK147
SD300
SK907
SK914
SK904
SK906
撹乱
撹乱
SD1145
SD923
ST1173
ST1241
ST1060
SB1358
0
10m
(1 : 400)

第４図　遺構配置図

Ⅲ　検出された遺構

1　遺構の分布

今回の調査で発見された主な遺構は、竪穴住居跡（ＳＴ）・掘立柱建物跡（ＳＢ）・溝跡（ＳＤ）・土壙（ＳＫ）・墓壙群、柱穴等である。

調査区北端部は黄褐色の砂で覆われ、地表下１ｍに近い堆積層となっている。また、所々に風化して砕けた黄色の礫岩のまとまりがあったり、河原石の集積があったりと、土壙・柱穴の検出がみられるものの、明確な遺構を確認することはできない。さらに、今回調査区の中央部分で、微高地から斜面にかけては、包含層が削平され土壌の改変を受けてあったり、黄褐色粗砂の堆積層があったりと遺構の検出はできなかった。

安定した面を把握しにくい中でも、北半部と南半部で住居跡が検出された。特に南半部の住居跡はほぼ同一方向に向けられて造られており、ほぼ同時期に存在した古代の住居跡群と考えられる。縄文時代～弥生時代にかけての住居跡については明確には確認されなかったが、ほぼ円形に配置された石組みの配石遺構を検出した。

グリッドのＹ＝３０よりすぐ南で墓壙群を検出した。開田事業の際に上部の大部分を削平され、底部がわずかに残っている状態であったが、小玉が出土し、朱も確認された。他に土器の廃棄壙と思われる土壙など数基を検出した。

また、古代の住居跡により切られていたり、開田・耕作等により撹乱を受けていたりして壊されている場所もあるが、溝跡も検出した。

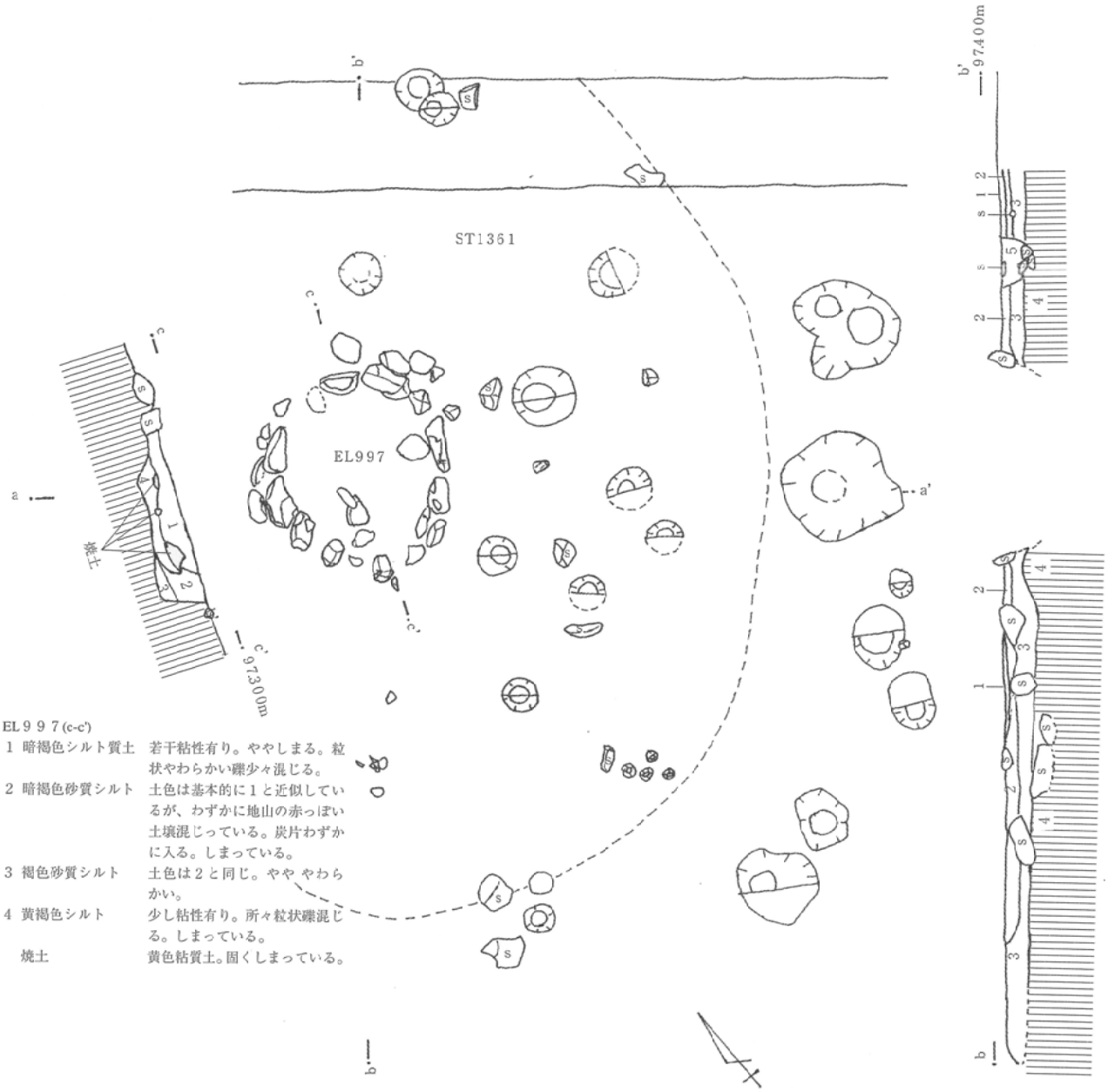
小穴（ピット）は撹乱を比較的受けていない調査区全面に検出されたが、確実に柱穴と思われるようなものは少なかった。

縄文時代晩期頃の遺構と、古代の遺構が混在して、さらに包含層が動かされている部分があり、安定した遺構面は把握しにくい。

2　竪穴住居跡（ＳＴ）

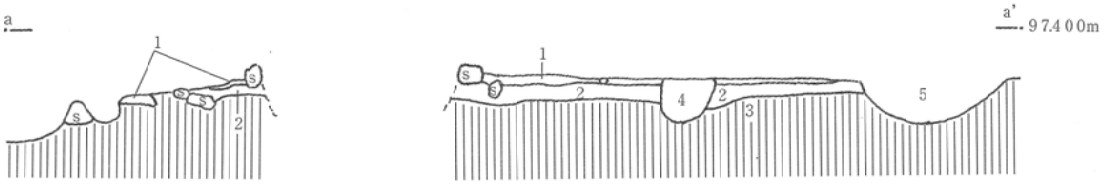
ＳＴ１３６１・ＥＬ９９７（第５図）

花ノ木遺跡は、以前より縄文時代晩期から弥生時代の遺跡と言われており、今回もその時代の住居跡の検出が期待されていたが、明確な検出には至らなかった。しかし、出土した遺物等から、その頃の時代と推定される遺構で、ほぼ円形に配置された石組の配石遺構を調査区の南半部（８，４８～５０）Ｇで確認した。この石組を中心として住居跡の範囲・大きさの検出に慎重を期したが、明確な範囲も柱穴も確認するには至らなかった。平面プラン検出段階で範囲の線を推定して引いてみた。住居内は酸化鉄で赤化した赤褐色砂質土で、わずかに炭や黄褐色ないし赤い焼土を均一に含んでおり、固くはないがしまっていた。住居の外は、酸化鉄を含む赤褐色砂質土で指で押すと表面が一部低くなった。石組は約８０ｃｍの直径の円状に２０ｃｍ前後の大きさの石が配置されており、黄色粘質土で固くしまっている焼土もみられた。



EL997(c-c')

1 暗褐色シルト質土	若干粘性有り。ややしまる。粒状やわらかい礫少々混じる。
2 暗褐色砂質シルト	土色は基本的に1と近似しているが、わずかに地山の赤っぽい土壌混じっている。炭片わずかに入る。しまっている。
3 褐色砂質シルト	土色は2と同じ。やや やわらかい。
4 黄褐色シルト	少し粘性有り。所々粒状礫混じる。しまっている。
焼土	黄色粘質土。固くしまっている。



(a-a')

1 黄褐色シルト	少し粘性有り。所々に粒状礫混じる。しまっている。
2 赤褐色砂質混土	しまっている。
3 褐色粗砂	さらさらしてゆるい。
4 黒褐色	焼土粒混じる。(EP974)
5 黒褐色	焼土粒混じる。(SK1360)

(b-b')

1 褐色砂質シルト	やや やわらかい。
2 黄褐色シルト	少し粘性有り。所々に粒状礫混じる。しまっている。
3 赤褐色砂質混土	しまっている。
4 褐色粗砂	
5 黒褐色	焼土粒混じる。(EP1381)

0 1m
(1:30)

第5図　ST1361、EL997住居跡

以下は古代の竪穴住居跡の概略を述べる。

ＳＴ１１７３（第６図）

調査区の南側（１０，５４～５６）Ｇで検出された竪穴住居跡である。平面プランは南北に２８０ｃｍ、東西２３０ｃｍの大きさである。確認面から床面までの高さは２０ｃｍ～２５ｃｍである。ピットは確認することができなかった。焼土は一部検出したがカマドについては明確には確認できなかった。住居内から赤焼土器の甕（かめ）や須恵器の坏（つき）が出土している。須恵器の坏の一つに、底に墨書で「生」と読める土器が出土した。

ＳＴ１０５（第７図）

調査区の北東（３２，２２）Ｇで検出された竪穴住居跡である。平面プランは隅丸方形を呈しており、南北に２４０ｃｍ、東西に２８０ｃｍである。確認面から床面までの高さは約２０ｃｍである。ピットとカマドは確認できなかった。住居跡南には土壙が認められた。住居跡覆土からは、須恵器甕体部や赤焼土器底部等を検出した。また、用途不明の鉄製品も出土している。

ＳＴ３８０（第８図）

（２８，２４）Ｇ杭を位置するところに検出された竪穴住居跡である。平面プランが確認した長さで南北に２８５ｃｍ、東西に２６０ｃｍの隅丸方形の住居跡である。確認面から床面までの高さは最大で１４ｃｍである。ピットとカマドは確認できなかったが、住居の南東隅に火を焚いた跡の焼土が検出された。住居跡覆土からは、硯片や須恵器・赤焼土器の坏の一部が出土している。

ＳＴ１３０（第９図）

ＳＴ３８０の東側方向で検出された。長軸６４０ｃｍ、短軸５４０ｃｍの大きさの住居跡である。住居内及び壁際にピットが数多く確認されたが、明確に柱穴と思われるものは確認することはできなかった。住居の一部が溝跡を切っていた。南側にはカマドと思われる跡があり、断面を見ると炭化物を多く含んでおり、焼土も部分的にみられる。出土した遺物はほとんどが破片であったが、その中でも須恵器の坏の底部が出土している。

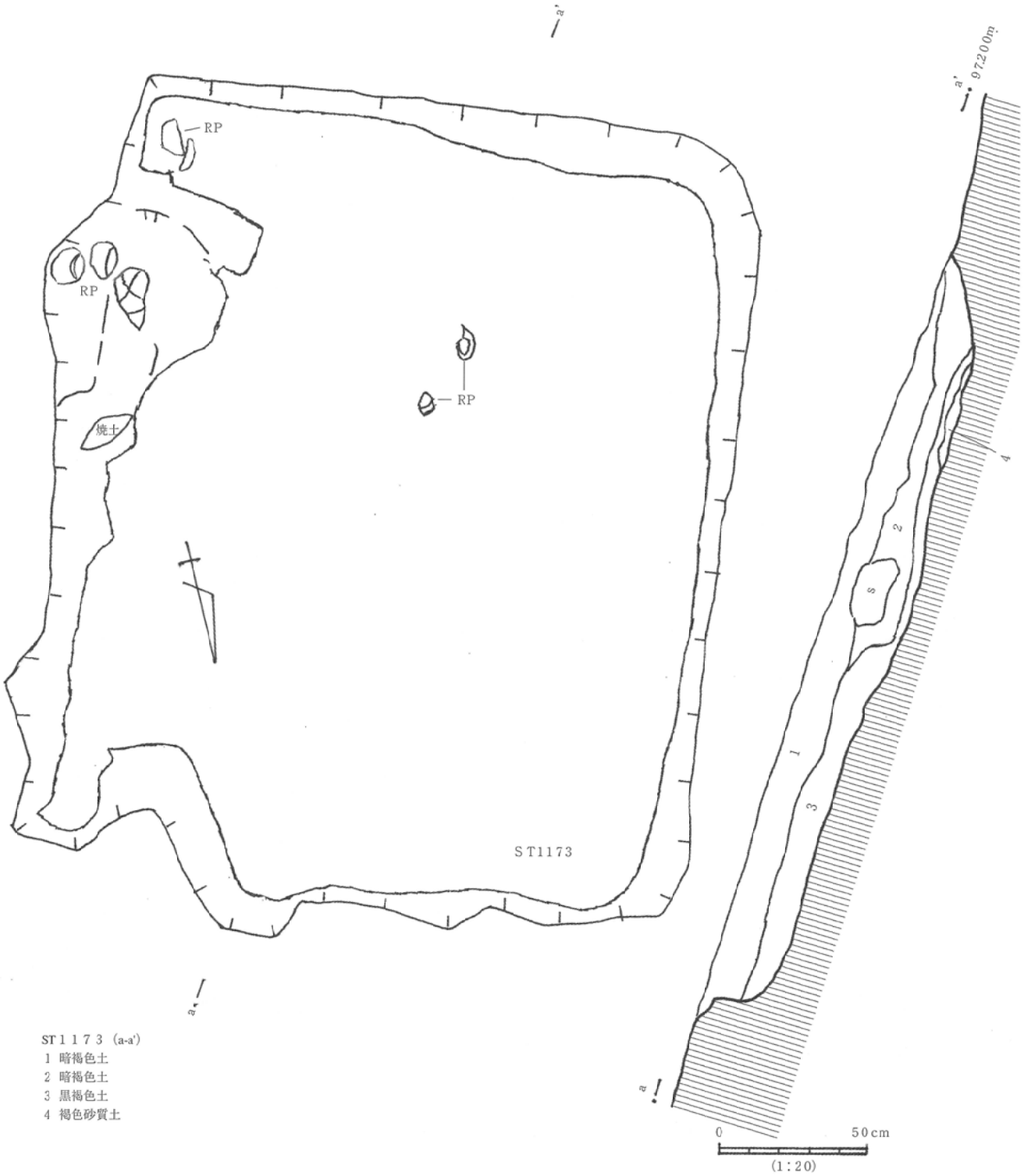
ＳＴ１０６０（第１０図）

調査区の一番南側で、ＳＴ１１７３とほぼ同一方向に向けて造られていると思われる竪穴住居跡である。（６～１０，６０～６４）Ｇに位置し、南北に５８０ｃｍ、東西に５５０ｃｍの大きさである。確認面から床面までの高さは１０ｃｍ～１５ｃｍである。床面は褐色粗砂よりわずかに暗くしまっていて、その下面は砂質土の下に礫が均等につまっており、礫の上に平らになるように入れられている。ピットは数個確認されたが、明確な柱穴になるものは不明である。カマドは南側にみられるが、明確な検出とはいかなかった。ただし焼土がみられ、カマドの上から落ちた平らな土がまのようなものを確認した。住居の覆土から須恵器の坏等が出土している。

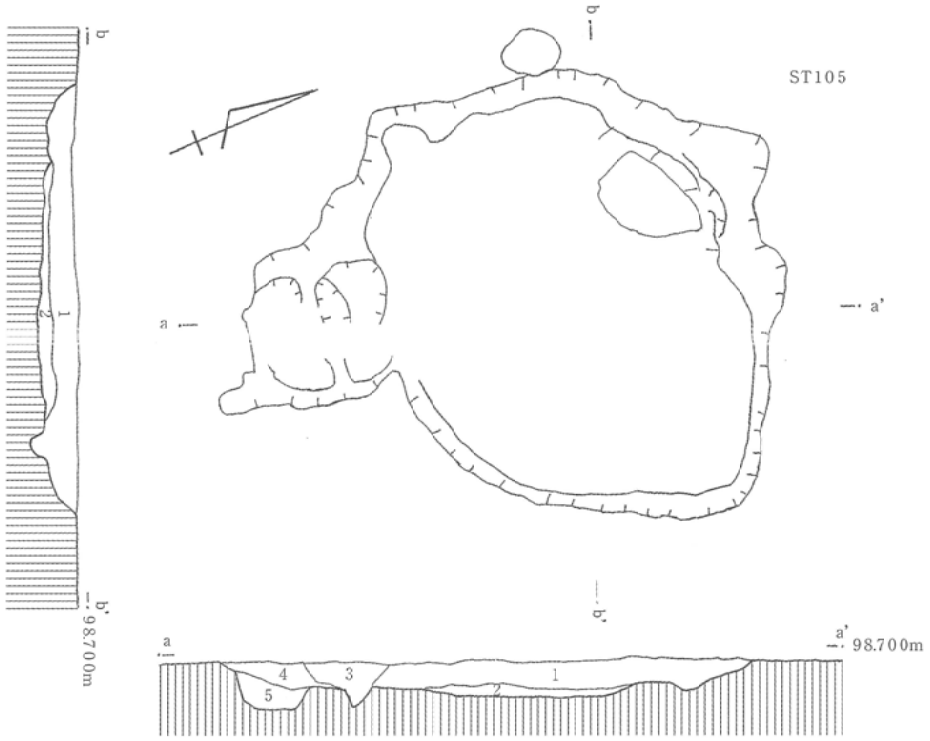
ＳＴ１２４１（第１１図）

調査区の南半部南西側で検出され（８～１０，４８）Ｇに位置する。平面プランは南北

に３００ｃｍ、東西に３６０ｃｍの竪穴住居跡である。確認面から床面までの高さは２０～２５ｃｍである。ピット、柱穴は確認できなかった。床面は水気を含んでおり、地山を掘り下げていくと、水がしみ出てきた。住居跡の南西角にカマド跡が検出され、焼土がまとまった形で確認された。床面からは、土圧で潰れていたが、ほぼ完形の須恵器や赤焼土器の坏が数十点伏せられた状態で出土した。また、木材が表面が炭化した状態で一緒に出土した。



第６図　ＳＴ１１７３竪穴住居跡

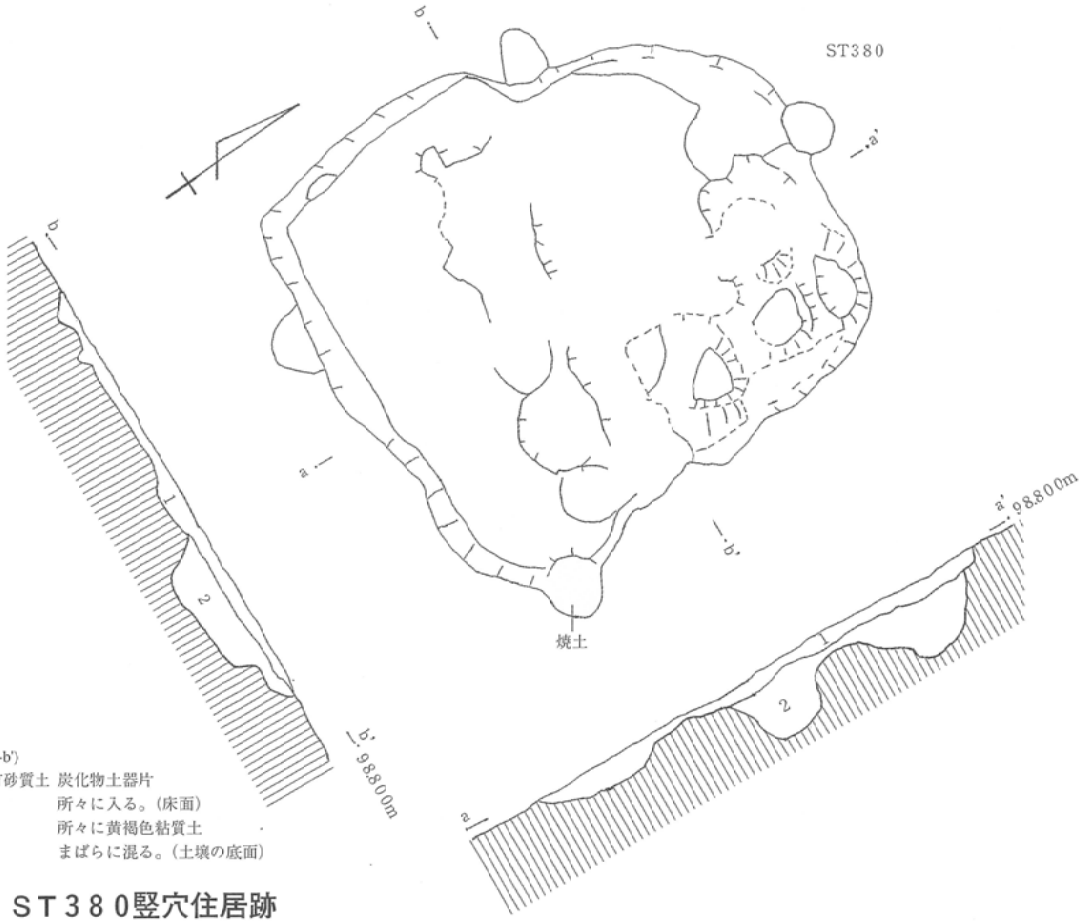


ST105(a-a')
1 暗褐色土
2 やや粘る褐色土　黄色土がわずかに混る。
部分的に極く薄く、黄褐色の粘質土を貼っている。
3 褐色土　黄色土がブロック状に混る。
4 褐色土　黄色土がわずかに混る。
5 褐色土　黄色土が混る。

ST105(b-b')
1 暗褐色土
2 やや粘る褐色土　黄色土がわずかに混る。
部分的にごく薄く黄褐色の粘質土を貼っている。

0　1m
(1:40)

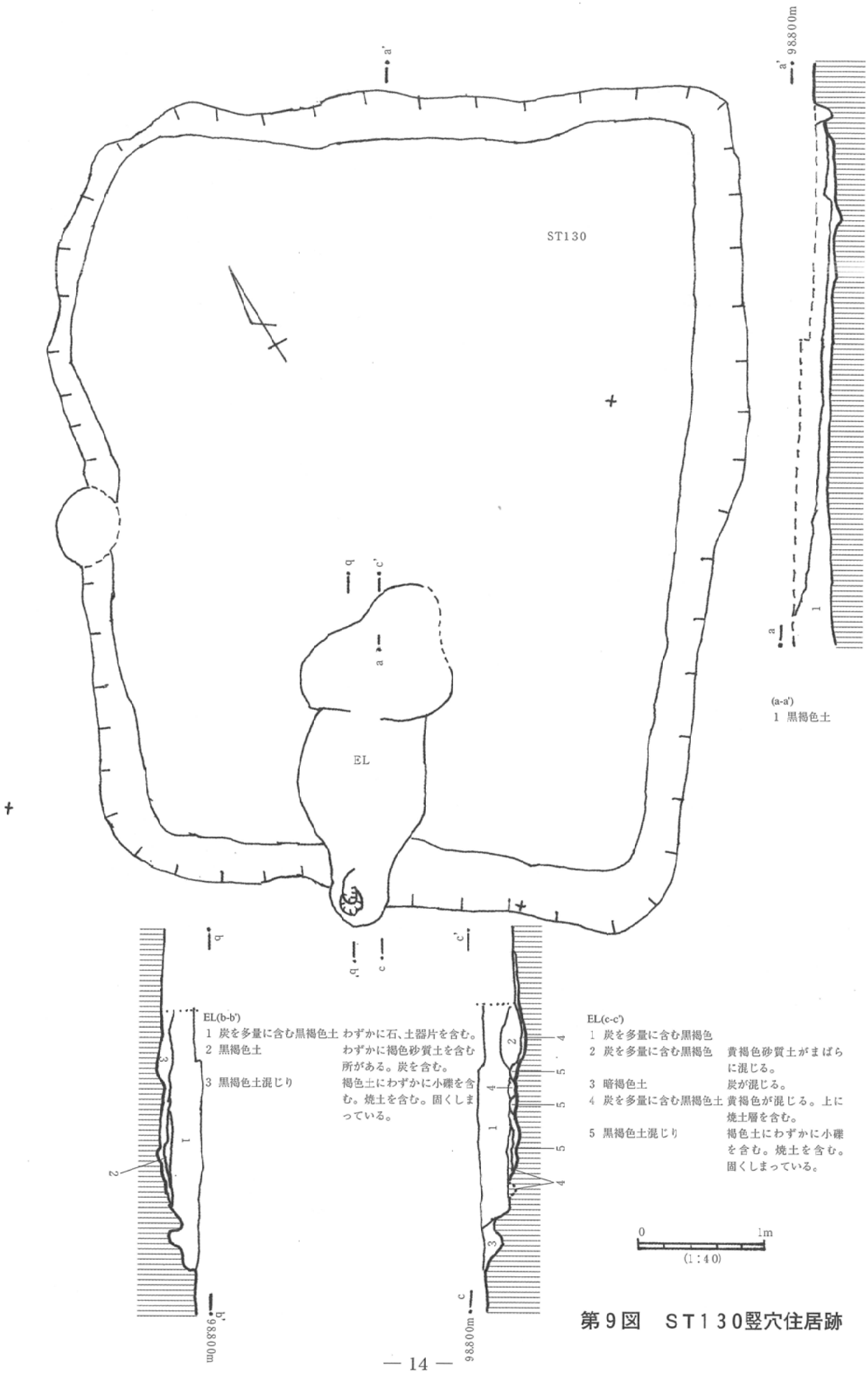
第7図　ST105竪穴住居跡



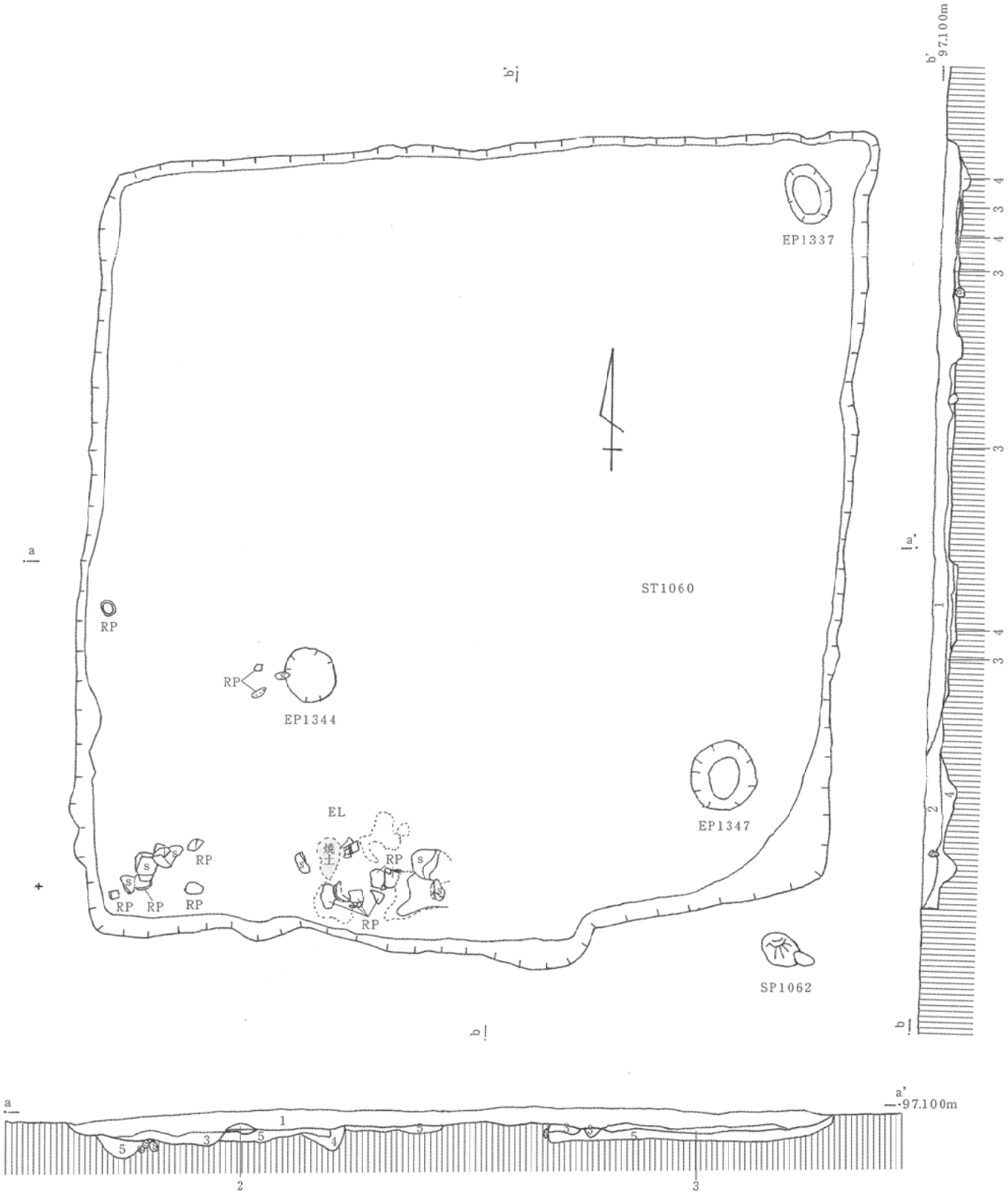
ST380(a-a'、b-b')
1 黒褐色粘性有砂質土　炭化物土器片
所々に入る。(床面)
2 暗褐色土　所々に黄褐色粘質土
まばらに混る。(土壌の底面)

第8図　ST380竪穴住居跡

0　1m
(1:40)



第9図　ST130竪穴住居跡



ST１０６０(a-a')

1 暗褐色シルト質　わずかに細かい粒状の礫（粗砂に近い）を含む。しまっている。
2 黒褐色シルト質　粘性若干あり。ゆるい。炭化物の粒含む。
3 褐色粗砂よりわずかに暗い。しまっている。土器片含む。
4 暗褐色シルト質　細砂。上辺に黄色い礫含む。
5 褐色砂質土

ST１０６０(b-b')

1 暗褐色土　黄礫をわずかに含む。炭化物含む。
2 黒褐色土　炭化物を多量に含む。焼土粒を少し含む。
3 暗褐色土　褐砂が縞状になっている。
4 褐色砂質土

0　1m
(1:40)

第１０図　ＳＴ１０６０竪穴住居跡

EL1242 (b-c-d)

1 褐色少し粘性のある粗砂。炭化物が大量に混じる。
2 黄褐色の焼土　炭化物がまばらに層状に入る。
3 黒褐色炭化物層　縞状にわずかに黄褐色焼土入る。
4 黄褐色焼土　炭化物が2よりやや多い。水気を含む。
5 黒褐色　炭化物を多量に含む。

ST1241 (a-a')

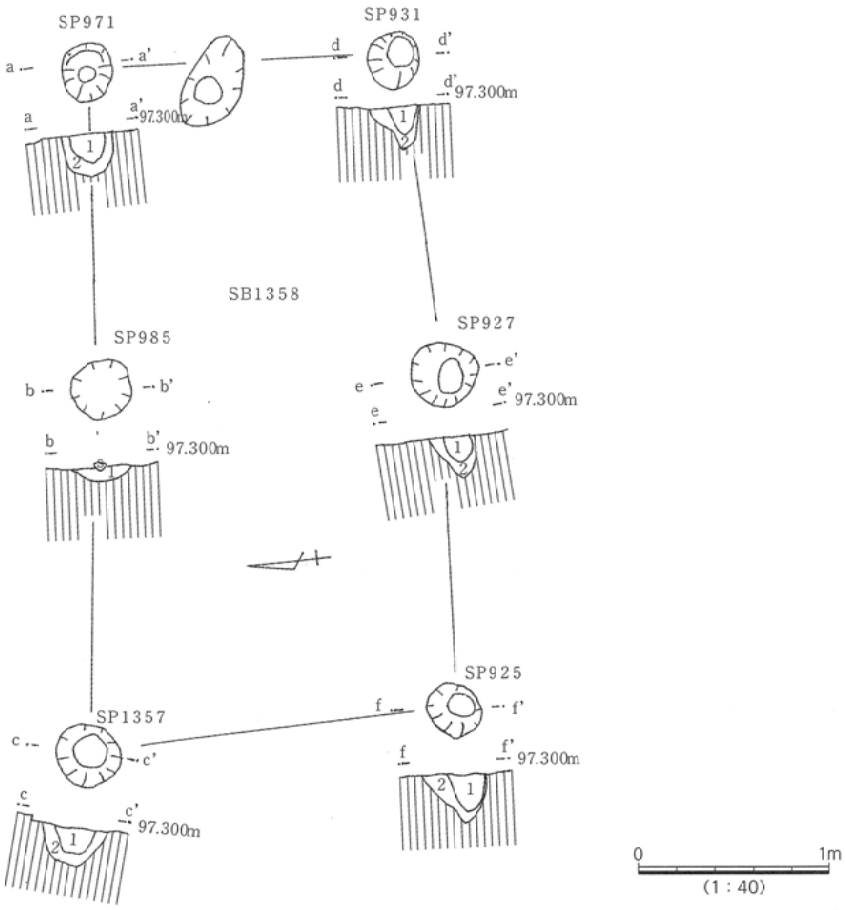
1 暗褐色砂質シルト　粒状礫所々混じる。しまっている。
2 暗褐色砂質シルト　粒状礫無し。木片が多く含まれる。ゆるい。
3 暗褐色砂質シルト　粒状礫無し。木片が多く含まれる。ゆるい。上層より若干粘性有り。
4 暗褐色砂質シルト　粒状礫わずかに混じる。しまっている。1より少々赤っぽい。

第11図　ST1241竪穴住居跡

3　掘立柱建物跡（ＳＢ）

ＳＢ１３５８（第１２図）

今回の調査で掘立柱建物跡が１棟検出された。調査区の南半部で、（６～８，４８～５０）Ｇに位置し、ＳＴ１２４１の南側である。１間×２間の建物である。古代の竪穴住居跡と同じ方向に向けられて東西に長い建物である。柱間は南北、東西とも１７０～１８０ｃｍでほぼ等間隔である。



SP９７１(a-a')
1 暗褐色砂質土　上辺に粒礫を含む。遺物無し。炭片わずかに含む。ゆるい。
2 暗褐色砂質土　わずかに粒礫含む。下層は地山の赤っぽい土混じる。

SP９８５(b-b')
1 暗褐色砂質土　ブロック状に小石大の礫混じる。少ししまる。

SP１３５７(c-c')
1 暗褐色砂質土　幾分粒礫含む。しまりあり。下層よりやや黒っぽい。
2 暗褐色砂質土　中位より下辺に赤っぽい地山土混じる。下部に土器片粒礫混じる。

SP９３１(d-d')
1 暗褐色砂質土　上辺に粒礫含む。遺物無し。少ししまっている。下層よりやや黒っぽい。
2 暗褐色砂質土　上辺に粒礫含む。下層は地山の赤っぽい土及び粗砂混じる。

SP９２７(e-e')
1 暗褐色砂質土　わずかに粒礫含む。遺物無し。少ししまっている。下層よりやや黒っぽい。
2 暗褐色砂質土　中位より下に細砂混じる。中位より上辺に粒礫含む。ゆるい。

SP９２５(f-f')
1 暗褐色砂質土　上辺にわずかに粒礫含む。少ししまりあり。下層よりもやや黒っぽい。
2 暗褐色砂質土　わずかに粒礫含む。下層壁面にかけて、地山の砂質土混じる。

第１２図　ＳＢ１３５８掘立柱建物跡

4　土壙（ＳＫ）

縄文時代の土壙が数基確認されているが、以下は墓壙と思われるものを含めて主なものについて記述する。

ＳＫ２８（第１３図）

調査区の北半部北東で（３４，２０）Ｇ内に検出された。土壙とは物を貯蔵したり、ゴミ捨て場として地面に掘った穴などを言うが、これは、直径が約１４０ｃｍの土器の廃棄壙と思われる。土器の堆積層は薄く、また土器の上半部がそっくり削り取られており、開田事業の際の工事による影響があるものと思われる。

ＳＫ１４７（第１４図）

調査区の北半部西側で（２６，２０）Ｇに検出された土壙である。土器の堆積層も薄く、長径約１７０ｃｍで２つの穴が連続するような形で確認された。深さは約３０ｃｍ程度で、土壙の上面と中位面から焼土層もみられた。土器片が多数出土し、縄文時代の晩期から終末期のものと考えられる。

墓壙群（第１５図）

調査区の中央部北側、（２０～２２，３０～３２）Ｇにかけて、墓壙と考えられる遺構を検出した。ただし、開田事業時に地山まで削り取られ、墓壙の底の部分だけが残されたように検出された。

ＳＫ９０４は長径が９３ｃｍ、短径が５３ｃｍの不整楕円形状である。深さは１０ｃｍと浅く、ベンガラ（赤色の顔料・朱）を塗った痕跡はなかったが、ヒスイ製等の小玉数個とかけら、さらに土器小片が検出された。

ＳＫ９０６は、ＳＫ９０４のすぐ西側で検出された。一部削られて明確でない部分もあるが、長軸で約２５０ｃｍと大きい。確認面からの深さは１５～２０ｃｍである。石鏃が４点、土器片が多数出土しており、墓壙というより大きな土壙といえる。

ＳＫ９０７は、墓壙群の一番東側から検出され、長径１１５ｃｍ、短径７３ｃｍの不整楕円形をしている。深さは１０ｃｍである。朱が３カ所にそれぞれ塗られており、他にも掘り込みがあるため、数基が重なり合っていると考えられる。その中の１カ所から複数の小玉と土器小片が検出された。

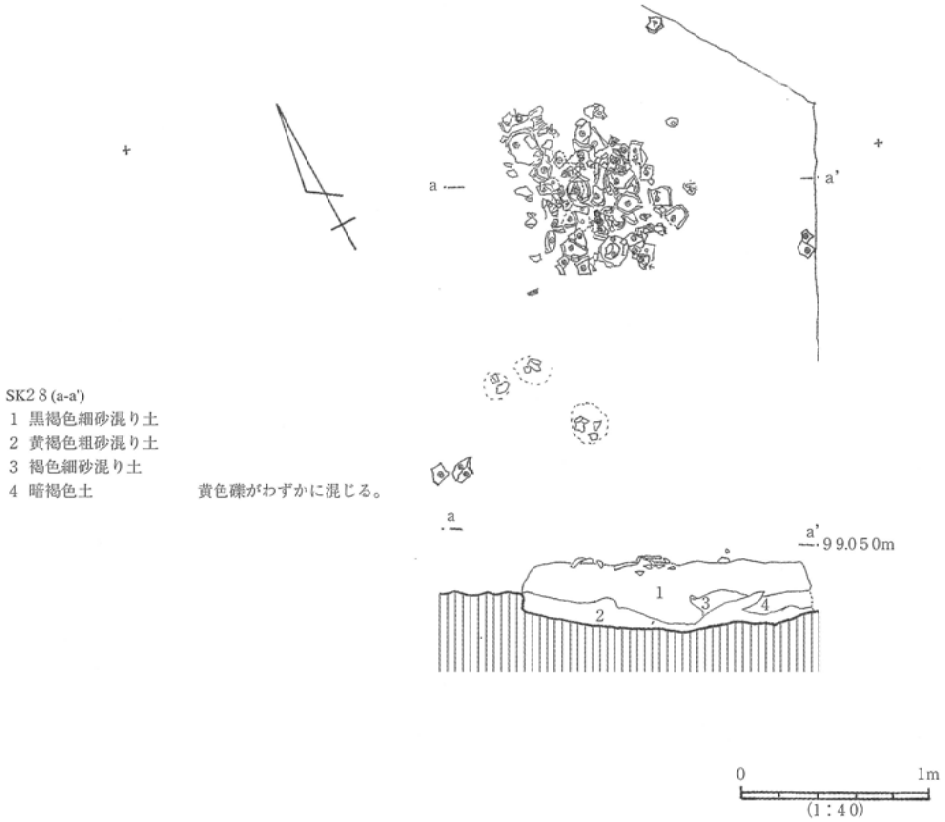
ＳＫ９１４は、ＳＫ９０７のすぐ西側、ＳＫ９０４のすぐ北側で検出された。長径１３６ｃｍ、短径７５ｃｍの不整楕円形で深さは８ｃｍと浅い。深さ３～５ｃｍより朱が検出された。

ＳＫ９１６は一番南側から検出され、長径２１０ｃｍ、短径７０ｃｍの不整楕円形で深さは１４ｃｍである。若干朱が上面に混じっているがはっきりしない。

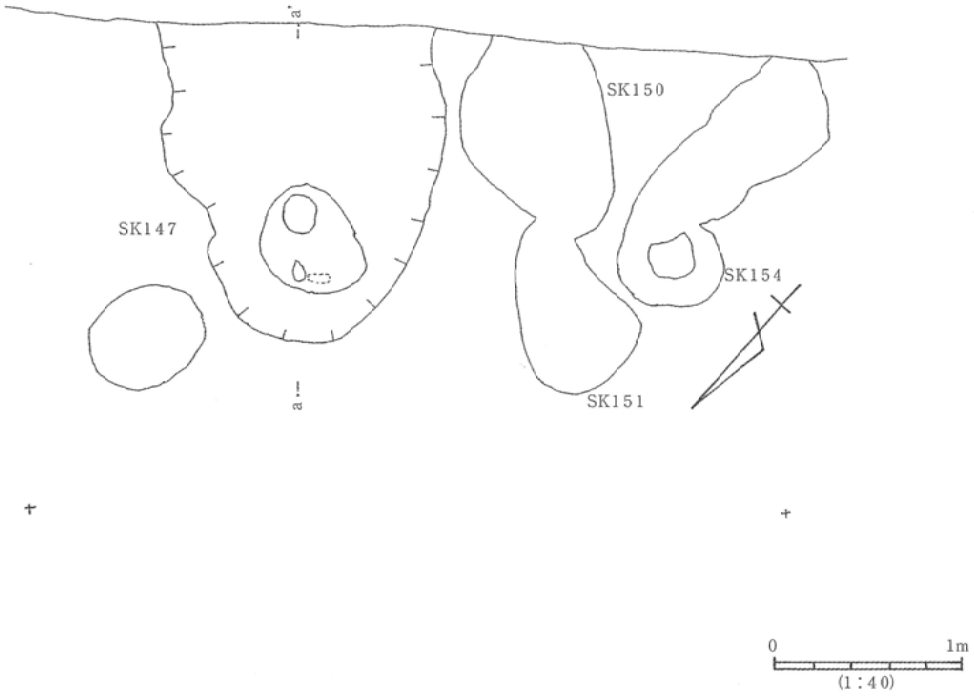
5　溝跡（ＳＤ）

ＳＤ３００は調査区北半部より検出され、南側に開いた馬蹄形をしている。東側で一部ＳＴ１３０に切り取られている。溝幅は４０～５０ｃｍ、深さ２０ｃｍ前後で、出土遺物

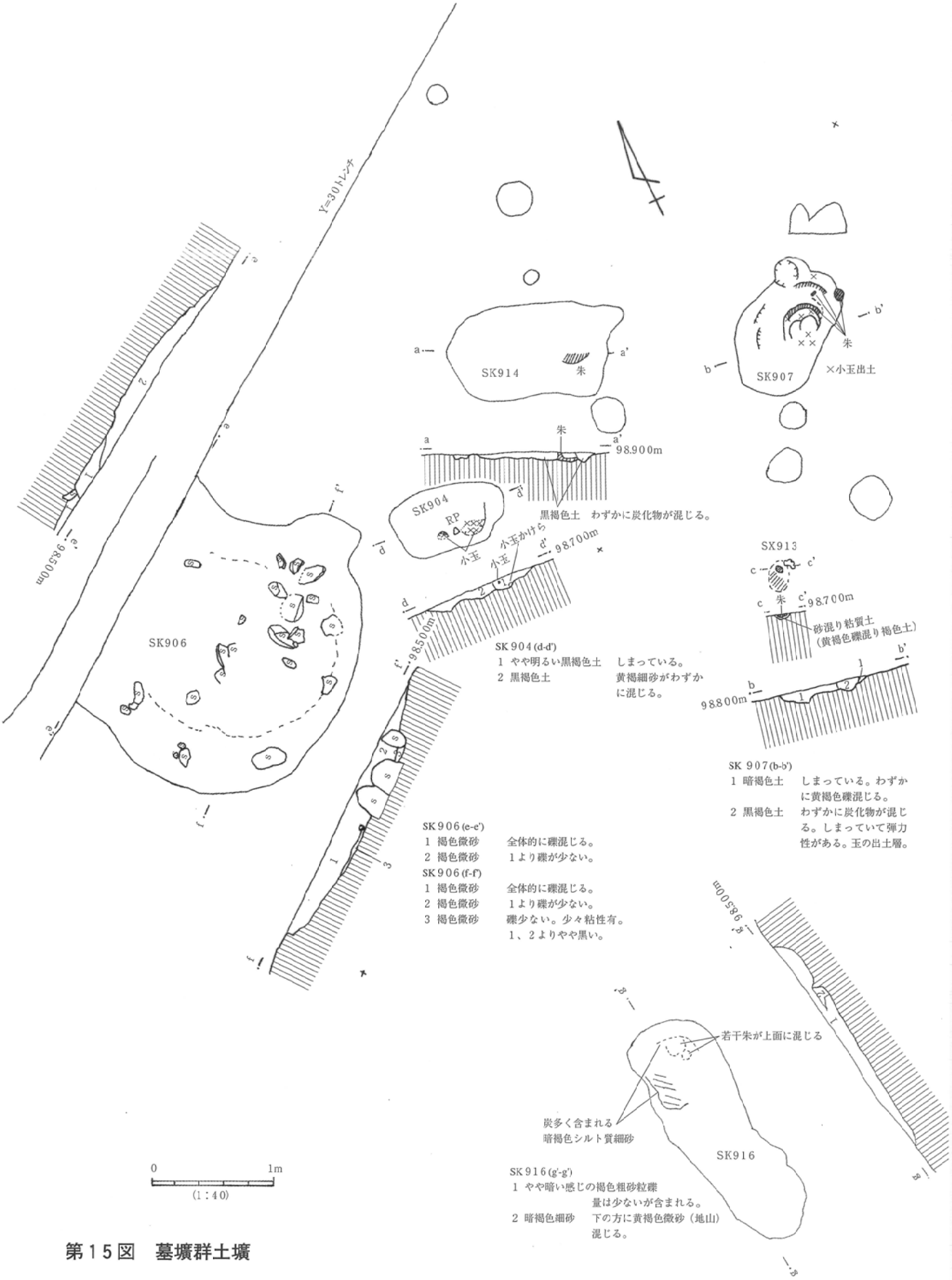
から縄文時代に属するものと思われる。南半部からは、約１０～１３ｍの間隔で北西から南東に並行する２本の溝跡を検出した。西側のＳＤ９２３、東側のＳＤ１１４５で幅は約３０～５０ｃｍである。



第１３図　SK２８土壙



第１４図　SK１４７土壙


Y=30トレンチ
SK914
朱
SK907
×小玉出土
98.900m
SK904
RP
小玉
小玉かけら
黒褐色土　わずかに炭化物が混じる。
98.700m
98.500m
SK906
SX913
砂混り粘質土
(黄褐色礫混り褐色土)
98.800m
SK 904 (d-d')
1 やや明るい黒褐色土　しまっている。
2 黒褐色土　黄褐細砂がわずかに混じる。
SK 907(b-b')
1 暗褐色土　しまっている。わずかに黄褐色礫混じる。
2 黒褐色土　わずかに炭化物が混じる。しまっていて弾力性がある。玉の出土層。
SK 906 (e-e')
1 褐色微砂　全体的に礫混じる。
2 褐色微砂　1より礫が少ない。
SK 906 (f-f')
1 褐色微砂　全体的に礫混じる。
2 褐色微砂　1より礫が少ない。
3 褐色微砂　礫少ない。少々粘性有。1、2よりやや黒い。
98.500m
若干朱が上面に混じる
炭多く含まれる
暗褐色シルト質細砂
SK916
SK 916 (g'-g')
1 やや暗い感じの褐色粗砂粒礫　量は少ないが含まれる。
2 暗褐色細砂　下の方に黄褐色微砂（地山）混じる。
0
1m
(1:40)

第15図　墓壙群土壙

Ⅳ　出土した遺物

今回出土した遺物は整理箱で約１２０箱で、そのほとんどが縄文土器である。他に須恵器、赤焼土器、石器類などである。うち縄文土器は破片が大半を占め、完形品はほとんどない。また、復元可能なものも極めて少ない。

1　縄文土器

大部分が日常の生活で使用した深鉢などの粗製土器である。小さな破片が大半で、接合し復元できるものはほとんどない。また、遺構がらみの出土が少なく、グリッド毎の表土や包含層直上などからの出土が多い。

時代的には約２，６００～２，４００年前、縄文時代晩期後葉、亀ケ岡式土器に属する大洞Ａ－Ａ′式期の土器片の類が多く出土している。文様が「工」の字に似ている工字文、あるいは変形工字文の壷や鉢、また綾杉文と呼ばれる「＞＞＞」のような文様の土器片、口縁部に二つの突起のある浅鉢と思われる土器などが出土しているのがこの遺跡の特徴と言える。

2　弥生土器

はっきりと断定できる弥生時代の土器については、明らかにできなかったというのが実状である。弥生時代と思われる小型壷や刷毛目文の土器片など、数点が検出されているが特定までに至っていない。

3　古代の遺物

竪穴住居跡を中心に須恵器や赤焼土器が出土した。須恵器は貯蔵用の壷や甕、食器の坏、壷などで、赤焼土器は主に坏で小型の甕も出土している。ＳＴ１２４１からは、ほぼ完形の須恵器の坏を含め、壷や甕、赤焼土器の坏など数点が伏せられた状態でまとまって出土した。またＳＴ１１７３からは、底部に「生」と書かれた墨書の須恵器が出土した。底部は回転糸切りが主で、他にヘラ切りも見受けられる。ＳＴ１０６０からは底部ヘラ切りの須恵器が出土しており、時代が遡ると思われる。その他に三脚付皿のような黒色の土器で、「保」と書かれた土器も一点出土している。

4　土偶・土製品

土偶の出土は完形はなく、土偶の一部分と思われるものを含めて数点である。土偶頭部と思われる破片は、半円状で髪型を表現しているように見える。また、長径４．４ｃｍのほぼ丸い円で目、口、鼻のある顔を表現していると思われるものも出土した。土版では、四方に鍵型の連続した刻みがあり、中央部に鋸歯文の横帯がある文様のものも出土した。

5　小玉及びその他の出土遺物

調査区の中央より少し北東側の墓壙群から、ヒスイ製の小玉１点と緑色の軟石製の玉が数十点（破片を含む）出土した。玉は大きいもので直径９ｍｍ、小さいもので直径４ｍｍと大小様々である。紐を通したと思われる穴が開けられており、形も整ったものもあれば少し変形したものもある。出土した時は水を含んでおり、指先で潰せる程軟らかく、鮮や

かな緑色をしていた。

また、この墓壙群より南（１６，５０）Ｇで、削平され撹乱している地山の上から単独でヒスイ製の小玉１点が出土した。直径１．４ｃｍ、厚さ１．０ｃｍ、内径４ｍｍと大きいものである。他に鉄製品や古銭も数点ずつ出土している。

６　石器・石製品

・石鏃（せきぞく）

今回出土した石器の中で一番多かったのが石鏃で、６０点を確認できた。石器の材料となった石の多くは黄褐色や黒っぽい頁岩で、石鏃には赤い頁岩、淡い色の黒曜石、石英などがみられる。形態は付け根に柄に装着するための突起のある形で、一部茎がはっきりしないものもあるが、茎のあるものがほとんどである。茎のないものは確認できなかった。先が鋭く尖ったタイプと少々ずんぐりしたタイプがあり、完全な形で出土しているものが多い。

また、茎の部分が細くなく、付け根の部分が左右に開いているアメリカ型といわれる石鏃や、長さが１１ｍｍの小さい石鏃なども出土している。

・石槍（いしやり）

先端の尖った槍先形の石器で尖頭器ともいう。１０点の出土を確認した。

・石錐（いしぎり）

石製の錐であり、骨角器・石製品などに穿孔するための工具である。頭部が大きく錐部が短いものや、錐部が非常に細長いものなど９点が出土している。

・石匙（いしさじ）

つまみ状の小突起をもっていて、横型と縦型とがある。今回の調査では３点出土しており、いずれも横型である。

・石篦（いしべら）

篦状の形態をし、剥片の背面と主要剥離面の両面に加工され、長軸の末端が刃部となる石器である。石鏃の次に出土数が多く２２点を確認した。

・磨製石斧（ませいせきふ）

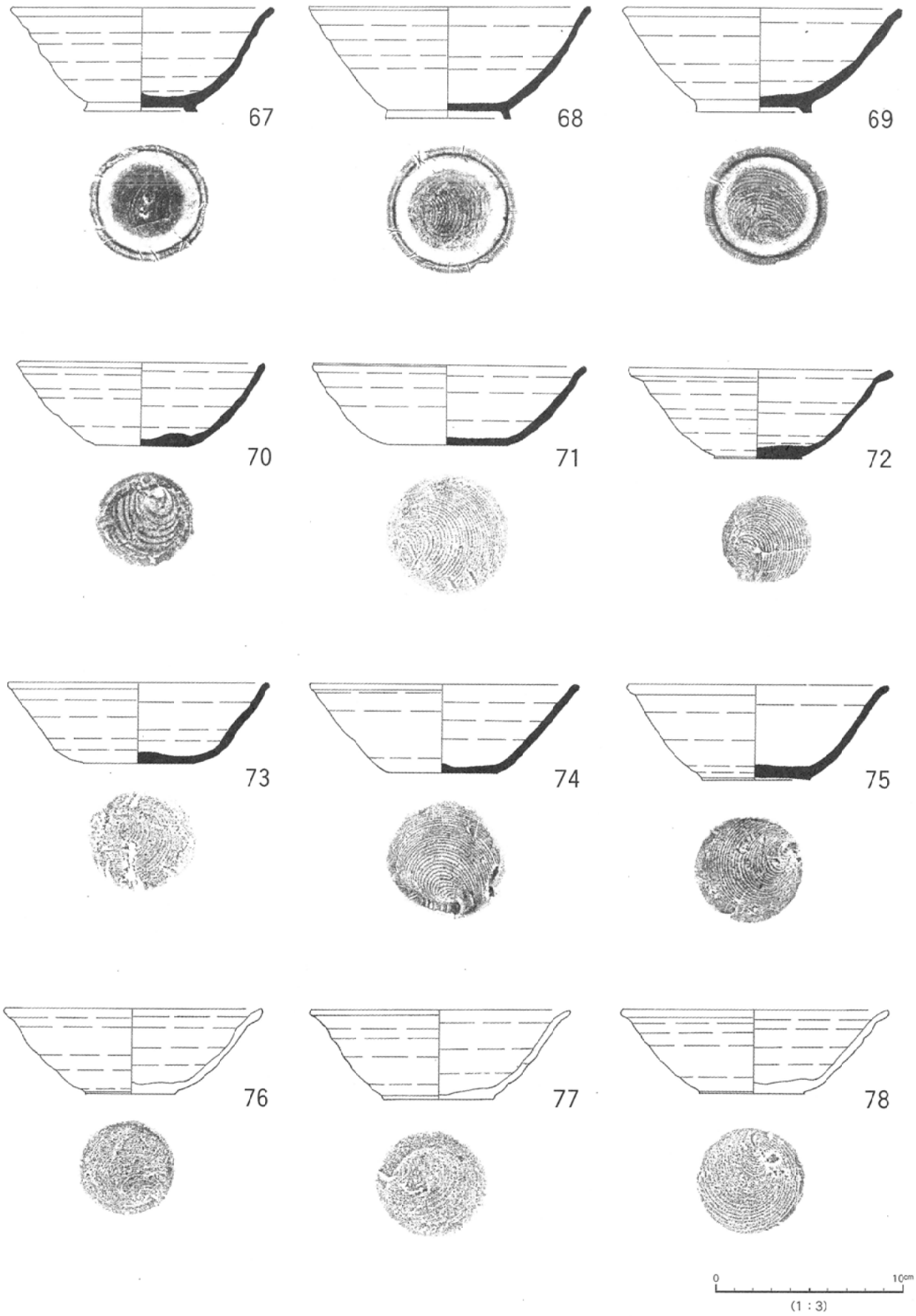
１７点の出土が認められた。

・石棒（せきぼう）

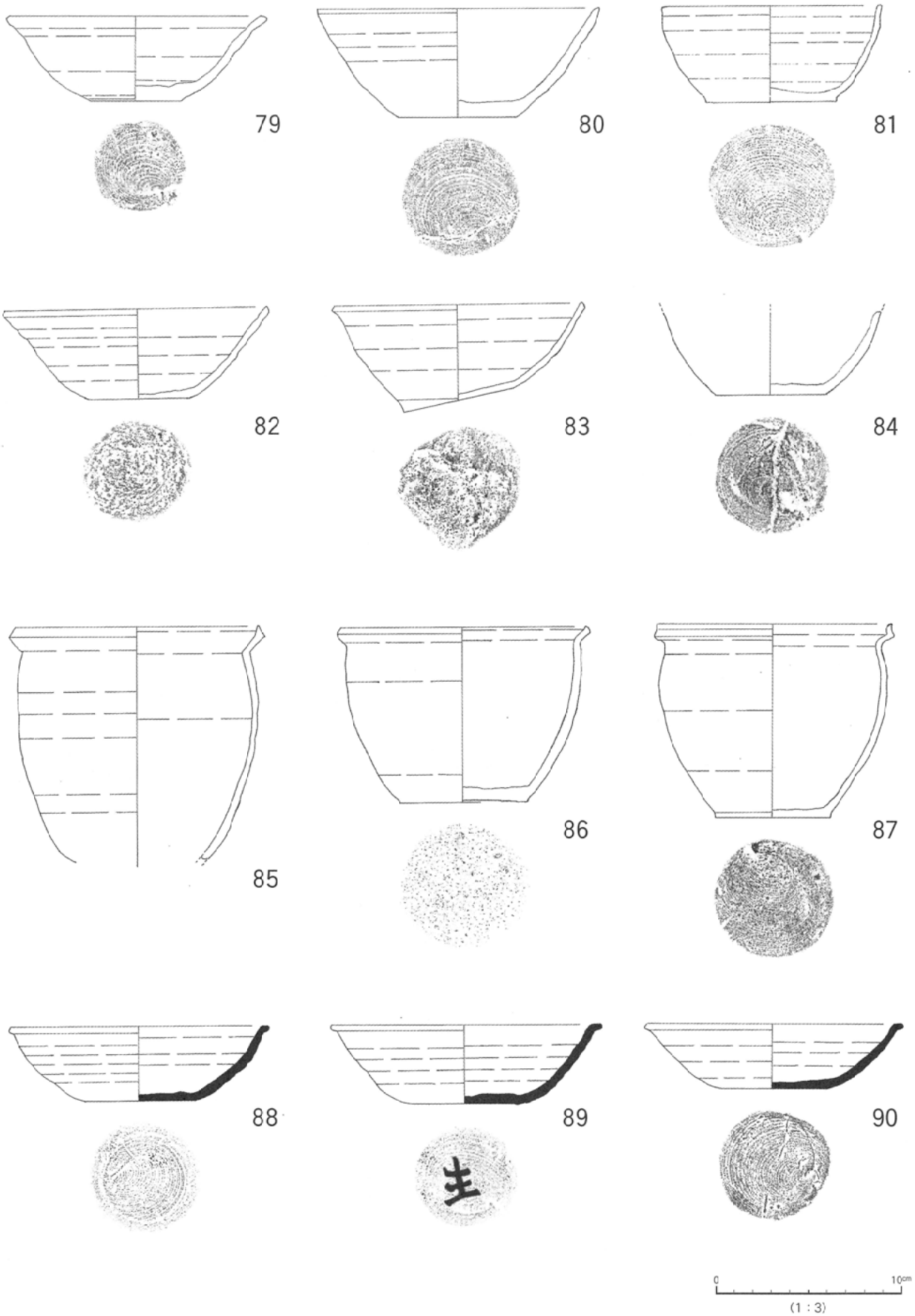
全部で８点の出土を確認した。一部が欠けているものの、長さが３６３ｍｍと長い石棒が２つに折れた状況で出土した。

・その他の石器・石製品

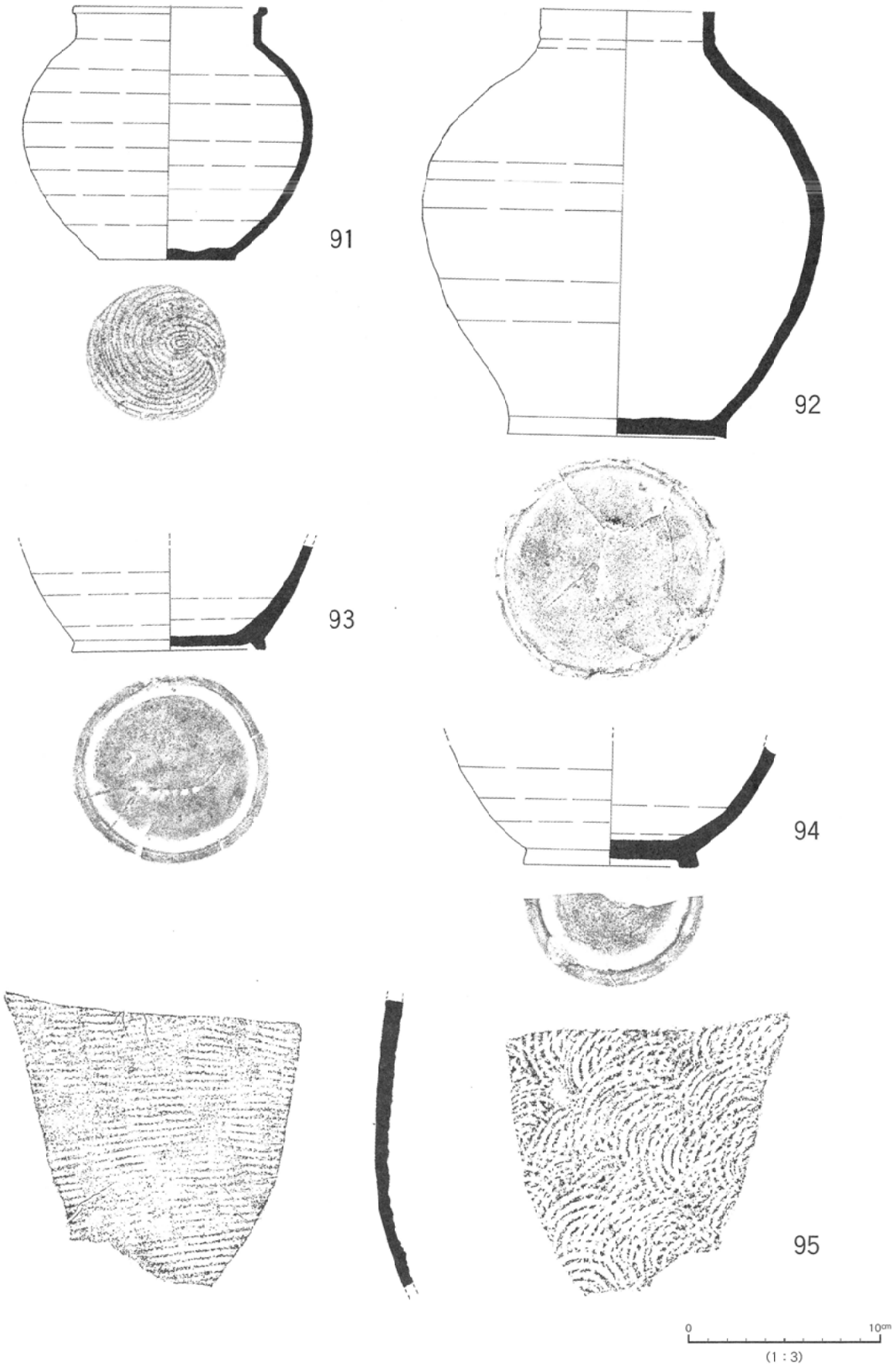
今回の調査では、石冠（せっかん）、石鋸（いしのこ）、独鋸石（どっこいし）など特異な形や祭祀に係わると思われる用途不明の石製品の出土も数点確認された。



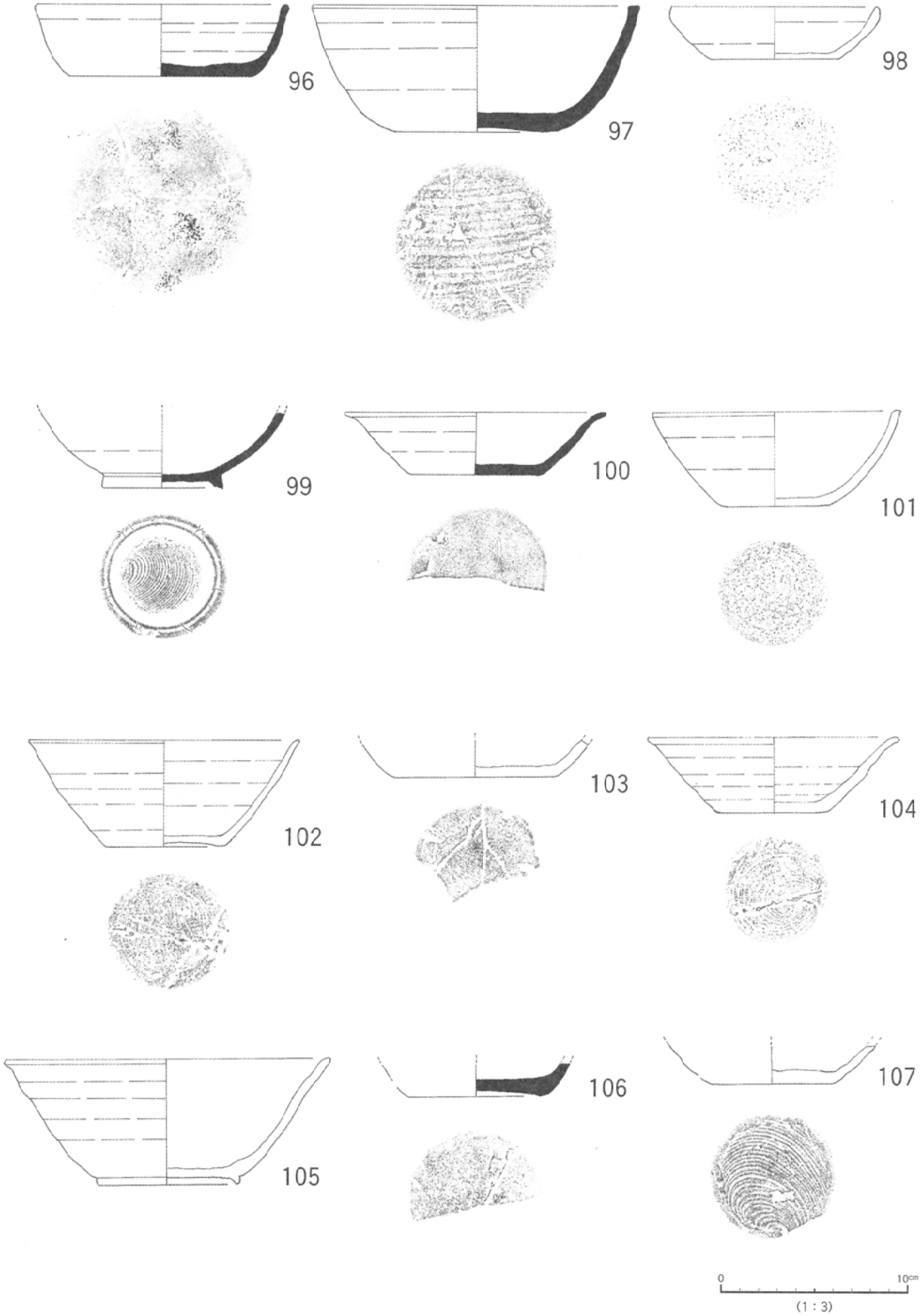
第16図　ST1241出土遺物



第17図　ST1241・ST1173出土遺物



第18図　ST1241・ST105出土遺物



第19図　ST1060・ST380・ST130・ST105出土遺物

表－1　出土遺物一覧表（1）

No	種類	器　種	出土地点	単位(mm) 口径	底径	器高	備　　考
1	縄文	高坏	SK28		57	79	
2	縄文	ミニチュア壺	SK28	15	36	58	
3	縄文	深鉢	SK28		48		体部～底部 小型
4	縄文	深鉢	SK28		60	127	口縁～底部 小型
5	縄文	椀	SK28		50		
6	縄文	深鉢	SK28		75		底部
7	縄文	深鉢	SK28				体部
8	縄文	深鉢	SK28				体部
9	縄文	深鉢	SK28				口縁
10	縄文	鉢	SK28				口縁
11	縄文	鉢	SK28				口縁
12	縄文	壺型土器片	SK28				
13	縄文	鉢	SK147				口縁
14	縄文	鉢	SK147				口縁 変形工字文
15	縄文	鉢	SK147				口縁～体部
16	縄文	鉢	SK147				体部
17	縄文	鉢	SK147				口縁～頸部 刺突文
18	縄文	土器片	SK904				4片
19	小玉		SK904				ヒスイ製1個 直径6mm厚さ4mm 穴2～2.5mm
20	小玉		SK904				軟石製11個 直径4～5mm 厚さ3mm 穴1～1.5mm
21	縄文	土器片	SK907				3片
22	小玉		SK907				軟石製 完形62個、他破片多数 大 直径9mm厚さ6mm穴2.5～3mm 小 直径4mm厚さ1.5～2mm穴1.5mm
23	小玉		(16,50)G				ヒスイ製 直径14mm厚さ10mm穴4mm　RQ314
24	縄文	鉢	SK906				口縁
25	縄文	鉢	SK906				口縁
26	縄文	深鉢	SK906				底部
27	縄文	深鉢	EL997				口縁～体部
28	縄文	深鉢	(10,52)G SK1367	126	72	181	小型　RP439
29	縄文	深鉢	(26,20)G SK154	(150)	85	155	小型　RP82
30	縄文	鉢	(26,20)GⅡ SK154		92	150	口縁～底部　RP82
31	縄文	深鉢	(10,52)G SK1373			(235)	底部欠 口縁～体部　RP441
32	縄文	深鉢	(10,58)G X=10ベルト		125	(350)	RP446
33	縄文	深鉢	(10,58)G X=10ベルト		115	297	口縁～底部　RP447
34	縄文	深鉢	(30,20)G		77	(155)	体部～底部
35	縄文	小型壺	(10,52)GⅢ下	48	52	98	RP417
36	縄文	小型鉢	SP1062	94	35	85	
37	縄文	浅鉢	(10,58)G	165	83	73	RP358
38	縄文	壺	(12,60)GⅢ	77			口縁～頸部　RP400
39	縄文	鉢	(10,50)GⅢ下				RP420
40	縄文	鉢	(34,22)G SX119		87		体部～底部
41	縄文	鉢	(34,20)G 地直				体部 綾杉文 工字文　RP103
42	縄文	鉢	(34,20)G 地直				口縁 綾杉文　RP104
43	縄文	鉢	(26,20)G Ⅲ				口縁 黒色磨きあり　RP85
44	縄文	深鉢	(34,18)G				口縁　RP37
45	縄文	台付浅鉢	(34,22)G Ⅲ				台部　RP70
46	縄文	台付浅鉢	(10,52)G SK1184				台部　RP443
47	縄文	深鉢	(34,22)G Ⅲ		57		底部　小型　RP50
48	縄文	深鉢	(34,20)G 地直		69		胴～底部　RP95
49	縄文	深鉢	(8,52)G SK1266		91		底部 木葉痕
50	縄文	鉢	(10,48)GⅡ X=10トレンチ			68	口縁～底部
51	縄文	四脚付土器	(8,54)G SK952F				底部
52	縄文	壺	(34,20)G 地直				口縁～肩 工字文 穿孔あり　RP102
53	縄文	深鉢	(6,52)G				体部　くし描き
54	縄文	蓋	(12,50)G				
55	縄文	壺型土器片	(34,18)G				RP42
56	縄文	浅鉢	(8,52)G SK1266				口縁
57	縄文	蓋	(12,46)G				穿孔あり　RP437
58	縄文	甕	(12,52)G				口縁 縄文中期
59	縄文	ミニチュア壺	(8,52)G	36		57	RP382
60	土偶		(8,50)G Ⅲ下				顔　RP386
61	土偶		(30,24)G SK127				胴部　RP243
62	土偶		(30,22)G Ⅲ				髪型　RP65
63	土版片		(26,20)G Ⅲ下				No64と接合　RP75
64	土版片		(24,20)G Ⅲ下				No63と接合　RP87
65	土版片		(22,28)G SP425F				RP109
66	異形土製品		(24,28)G Ⅲ上				RP86

表－2　出土遺物一覧表（2）

No	種類	器　種	出土地点	単位(mm) 口径	底径	器高	備　　考	
67	須恵器	高台付坏	ST1241	145	65	58	完形	RP10
68	須恵器	高台付坏	ST1241	150	69	58		RP11
69	須恵器	高台付坏	ST1241	150	65	57		RP16
70	須恵器	坏	ST1241	135	50	42	完形	RP2
71	須恵器	坏	ST1241	150	65	45	完形	RP8
72	須恵器	坏	ST1241	140	48	48	完形	RP9
73	須恵器	坏	ST1241	145	55	45		RP20
74	須恵器	坏	ST1241	148	60	48		RP21
75	須恵器	坏	ST1241	142	58	50		RP22
76	赤　焼	坏	ST1241	140	50	45	完形	RP3
77	赤　焼	坏	ST1241	140	60	48	完形	RP4
78	赤　焼	坏	ST1241	145	58	45		RP14
79	赤　焼	坏	ST1241	142	50	45		RP26
80	赤　焼	坏	ST1241	153	65	60		RP24
81	赤　焼	椀	ST1241	118	70	52		RP17
82	赤　焼	坏	ST1241	145	55	45		RP6
83	赤　焼	坏	ST1241	135	－	58	底部斜め	RP7
84	土師器	坏	ST1241	－	62	－	内黒	RP28
85	赤　焼	甕	ST1173	135	－	125	底部欠	RP4
86	赤　焼	甕	ST1241	－	70	93		RP15
87	赤　焼	甕	ST1241	128	65	102		RP26
88	須恵器	坏	ST1173	142	60	40	完形	RP7
89	須恵器	坏	ST1173	146	55	43	底部に「生」墨書	RP3
90	須恵器	坏	ST1173	140	60	35		RP5
91	須恵器	壷	ST1241	100	70	130		RP12
92	須恵器	壷	ST1241	93	120	220		RP5
93	須恵器	壷	ST1241	－	100	－	底部	RP19
94	須恵器	壷	ST1241	－	90	－	底部	RP23
95	須恵器	甕	ST105	－	－	－	体部	RP175
96	須恵器	坏	ST1060	135	100	37		RP3
97	須恵器	坏	ST1060	－	90	67		RP5(=7)
98	赤　焼	小皿	ST1060	110	70	27	完形	RP1
99	須恵器	高台付坏	ST380	－	67	－		RP126
100	須恵器	坏	ST130	－	70	33		RP214
101	赤　焼	坏	ST1060	132	57	50		980901Sベルト上イ
102	赤　焼	坏	ST380	145	65	57		RP124
103	土師器	坏	ST130	－	－	－	底部棄損　木葉痕	RP193
104	赤　焼	坏	ST1060	134	57	40		980901Sベルト上ロ
105	赤　焼	坏	ST380	－	75	67		RP114
106	須恵器	坏	ST105	－	70	－	底部	RP184
107	赤　焼	坏	ST105	－	65	－	底部	RP185
108	須恵器	両耳坏	(4,54)GⅢ					RP397
109	硯　片		ST380	－	－	15		RP244
110	黒色土器	皿	(8,52)G				三脚付皿「保」と書かれる	
111	赤　焼	甕	ST380	－	－	－	口縁～体部	RP129
112	須恵器カ		(10,54)G				焼成は須恵器、文様は縄文?	

表－3　石器・石製品一覧表

No	器　種	出土地点	単位(mm) 長さ	幅	厚さ	備　考	No	器　種	出土地点	単位(mm) 長さ	幅	厚さ	備　考
1	石　鏃	(32,22)G	18	12	5	先端部　RQ2	41	石　鏃	(12,56)G	32	13	5	
2	石　鏃	(30,20)GⅢ	27	12	10	RQ23	42	石　鏃	(12,52)G	33	15	8	
3	石　鏃	(34,18)GⅡ下	36	12	9	RQ32	43	石　鏃	(10,50)G	24	11	5	
4	石　鏃	(36,20)GⅡ下	29	10	8	RQ33	44	石　鏃	(8,48)G	31	15	6	
5	石　鏃	(36,20)GⅡ下	18	10	6		45	石　鏃	(5,46)G	21	11	7	
6	石　鏃	(34,18)GⅡ下	20	9	5	RQ34	46	石　鏃	(10,56)G	20	11	4	
7	石　鏃	(34,14)GⅡ下	22	13	6	RQ40	47	石　鏃	(10,58)G	19	13	5	
8	石　鏃	(30,20)GⅢ	32	12	8	RQ66	48	石　鏃	(14,54)G	25	11	4	
9	石　鏃	(26,20)GⅢ上	22	13	6	RQ72	49	石　鏃	(6,50)G	26	15	6	
10	石　鏃	(28,18)GⅢ上	29	16	9	RQ73	50	石　鏃	(8,54)GⅢ下	27	8	3	RQ391
11	石　鏃	(22,22)GⅡ下	22	14	6	RQ74	51	石　鏃	(14,58)G耕作土	36	15	5	アメリカ型　RQ310
12	石　鏃	(26,20)GⅢ	34	12	4	RQ79	52	石　鏃	(8,54)G SD923	36	13	7	RQ395
13	石　鏃	(28,20)GⅢ	31	14	3	RQ80	53	石　鏃	SK906	38	12	4	
14	石　鏃	(26,18)GⅢ	30	11	5		54	石　鏃	SK906	25	7	4	
15	石　鏃	(26,22)GⅢ下	44	14	6	RQ88	55	石　鏃	SK906　S側	20	11	5	
16	石　鏃	(26,22)GⅢ下	33	12	6	RQ89	56	石　鏃	SK906	23	14	5	
17	石　鏃	(16,28)G埋土	26	12	6	RQ93	57	石　鏃	X−0	27	13	6	RQ98
18	石　鏃	(32,20)G地山	30	14	6	RQ94	58	石　鏃	X−0	29	12	6	
19	石　鏃	(34,20)G地山	20	10	4	RQ96	59	石　鏃	X−0	43	13	6	
20	石　鏃	(6,42)G表土	28	13	7	RQ303	60	石　鏃	X−0	26	10	4	
21	石　鏃	(6,42)G表土	27	15	8	RQ304	61	石　槍	(32,20)G	40	19	10	RQ97
22	石　鏃	(6,42)G表土	35	12	5	RQ305	62	石　槍	(26,28)G	40	11	8	RQ106
23	石　鏃	(6,46)G表土	35	15	4	RQ308	63	石　槍	(6,46)G	50	17	10	
24	石　鏃	(12,36)G耕作土下	30	12	4	RQ309	64	石　槍	(10,52)G	49	13	3	
25	石　鏃	(16,44)G礫中	16	9	3	RQ311	65	石　槍	(8,54)GⅢ下	39	26	8	RQ398
26	石　鏃	(12,48)GⅡ下	42	15	5	RQ318	66	石　槍	(10,50)GⅢ下	55	27	8	RQ419
27	石　鏃	(10,52)GⅡ下	32	12	7	RQ326	67	石　槍	(24,20)GⅡ	41	27	11	スクレーパー　RQ4
28	石　鏃	(10,60)GⅢ上	64	37	12	RQ373	68	石　槍	SK914	40	18	7	
29	石　鏃	(12,58)GⅢ上	27	10	7	RQ375	69	石　槍	SK28E側F中	70	17	13	RQ237
30	石　鏃	(8,50)GⅢ上	24	12	6	RQ379	70	石　槍	(4,56)G SK1088	23	16	4	RQ463
31	石　鏃	(4,50)GⅢ上	27	13	6	RQ380	71	石　錐	(8,48)GⅢ上	40	7	5	RQ381
32	石　鏃	(4,54)GⅢ下	24	14	5	RQ385	72	石　錐	(28,16)GⅢ	26	16	5	RQ239
33	石　鏃	(4,54)GⅢ下	24	12	4	RQ387	73	石　錐	(10,52)GⅢ	28	35	9	RQ327
34	石　鏃	(4,52)GⅢ下	33	13	6	RQ388	74	石　錐	(10,58)GⅢ上	60	14	5	RQ328
35	石　鏃	(8,56)GF	41	9	4	RQ393	75	石　錐	(6,46)GⅢ下	35	22	4	RQ433
36	石　鏃	(8,56)GF	25	7	8	RQ394	76	石　錐	(6,56)GF	38	23	13	RQ392
37	石　鏃	(6,56)GⅢ下	36	11	6	RQ396	77	石　錐	(36,14)G SK68	38	37	14	RQ99
38	石　鏃	(8,60)G	40	12	8		78	石　錐	X−0	56	18	8	
39	石　鏃	(4,54)G	25	13	7		79	石　錐	X−0	39	23	7	
40	石　鏃	(12,52)G	21	12	7		80	石　匙	(36,12)GⅢ	75	66	17	RQ48

表－3　石器・石製品一覧表

No	器　種	出土地点	単位(mm) 長さ	幅	厚さ	備　考	
81	石　匙	(12,52)GⅡ下	46	65	11		RQ320
82	石　匙	ST130　EP232	43	56	7		RQ233
83	石　篦	(8,50)GⅢ下	31	11	5		RQ384
84	石　篦	(30,10)GⅡ	66	33	15		RQ3
85	石　篦	(32,18)GⅢ上	48	21	11		RQ43
86	石　篦	(30,12)GⅢ	62	31	16		RQ44
87	石　篦	(34,22)GⅢ直上	50	19	9	小型	RQ46
88	石　篦	(30,12)GⅢ	60	38	15		RQ47
89	石　篦	(18,28)G埋土	46	23	12		RQ240
90	石　篦	(14,46)G砂礫中	60	25	14		RQ316
91	石　篦	(14,48)G砂礫中	72	33	13		RQ317
92	石　篦	(10,60)GⅢ	70	32	15		RQ402
93	石　篦	(6,52)G	57	24	8		
94	石　篦	(10,56)G	80	31	18		
95	石　篦	(10,46)G	59	37	9		
96	石　篦	(6,48)GⅢ下	95	36	26		RQ454
97	石　篦	(12,56)GⅢ下	66	32	12		RQ464
98	石　篦	SK28W側F中	63	24	12		RQ238
99	石　篦	SK978F	80	31	14		RQ451
100	石　篦	(8,50)G SK964NW角	66	35	18		RQ462
101	石　篦	X−0	85	39	15		
102	石　篦	X−0	74	29	14		
103	石　篦	X−0	61	29	13		RQ1
104	石篦片	X−0	44	22	16		RQ69
105	磨　斧	(10,48)GⅡ下	93	50	31		RQ319
106	磨　斧	(10,46)GⅢ下	87	50	33		RQ429
107	磨　斧	(28,22)GⅢ下	97	54	33		RQ90
108	磨　斧	(12,50)GⅡ下	90	38	14	柄	RQ324
109	磨　斧	(10,56)GⅢ上	105	50	35	柄	RQ330
110	磨　斧	(8,44)GⅢ下	118	50	37	柄	RQ426
111	磨　斧	(6,54)GⅢ下	72	45	40	柄	RQ399
112	磨　斧	(14,54)GⅢ下	31	32	13	刀部先部	RQ434
113	磨斧片	(28,18)GⅢ	77	51	33	端部	RQ81
114	磨　斧	(14,36)G	40	37	20		
115	磨　斧	(12,58)G	41	35	12		
116	磨　斧	(6,48)G	116	53	27		
117	磨　斧	(8,44)G	120	55	35		
118	磨　斧	(4,60)G	71	38	31		
119	磨　斧	(8,54)GⅢ下	74	62	36	柄	RQ449
120	磨斧片	(24,20)G SP617	49	42	26		RQ101
121	磨　斧	SK906	132	48	28		
122	石　棒	(10,56)GⅢ上	363	30	23		RQ329
123	石棒片	(12,58)GⅢ下	105	31	25		RQ404
124	石棒片	(12,58)GⅢ下	60	38	38	頭部	RQ406
125	石棒片	(26,24)G	67	45	35		RQ108
126	石棒片	(10,48)GⅢ下	141	30	21		RQ428
127	石棒片	(12,58)G	41	33	32		
128	石棒片	(12,60)G	56	42	42		
129	石棒片	(10,50)GⅣ直上	130	35	37		RQ425
130	磨製石製品	(6,46)G Ⅲ下	63	23	14		RQ432
131	磨製石製品	(18,28)G 埋土	100	55	23		RQ92
132	磨製石製品	(4,58)G Ⅲ下	37	40	12		RQ448
133	磨製石製品	(6,52)G 杭北	107	99	36		RQ456
134	石　冠	(12,52)G Ⅱ下	64	91	43		RQ323
135	石　錐	(12,50)G Ⅲ下	85	67	41		RQ410
136	石　鋸	(12,58)G Ⅳ直上	140	55	35		RQ424
137	石　鋸	(8,44)G	91	55	22		
138	石　鋸	(10,56)G	55	49	24		
139	独鈷石	(10,50)G Ⅲ上	66	43	27		RQ325
140	敲　石	X=10ベルト.Y=50,52	92	61	50		RQ455
141	磨　石	(10,50)GⅢ下	89	86	50		RQ412
142	打　斧	(12,52)G Ⅱ下	70	47	31		RQ322
143	石製品	(12,58)G Ⅲ上	134	62	27		RQ331
144	石製品	(12,50)G Ⅲ下	85	62	45		RQ411
145	石製品	(10,52)G	132	40	38		
146	石製品	(8,44)G	68	65	50		
147	石製品	(32,12)G Ⅲ上	136	75	21		RQ45
148	石製品	(34,22)G Ⅲ	66	92	14		RQ51
149	石製品	(30,26)G Ⅲ	126	45	21		RQ64
150	石製品	(8,46)G	103	95	69		RQ436
151	石製品	(34,22)G	88	37	19		RQ68
152	石製品	SK978F	142	66	38		RQ452
153	石製品	X−0	115	105	100		

Ⅴ　まとめ

花ノ木遺跡は、法師川左岸の自然堤防、微高地上に立地している。今回の調査は、工業団地造成事業に伴う緊急発掘調査である。調査面積は２,９７１.１㎡で、平成９年度と平成１０年度の２か年にわたって現地調査を実施した。その結果、開田事業において遺構上面が一部破壊された部分もあったが、古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、溝跡等が検出された。出土遺物は整理箱で約１２０箱を数え、そのほとんどが縄文土器であるが、その中には完形な土器や復元可能な土器はほとんどなく破片が大半を占めた。

本遺跡の時期は、これまで縄文時代晩期～弥生時代初頭と言われてきたように、出土した遺物などから縄文時代晩期終末期の遺跡と言える。今回の調査では弥生時代と考えられる土器片以外に弥生時代のものと特定できる遺物・遺構の出土や検出はされなかった。時代の中心は縄文時代晩期と言えるが、その他にも平安時代に属する竪穴住居跡や須恵器等の出土などから、この時代も集落が形成されていたと言える。

縄文時代の遺構については、ほぼ円形に配置された石組みの配石遺構や、土壙、ピットが検出された。しかし全体的に言えることであるが、明確に良好な状態で検出された遺構はほとんどなく残念である。その中でも、調査区のほぼ中央より北側で検出された土壙は底部に朱を敷いた形跡が認められ、ヒスイ製の小玉や軟石製の玉が数十点出土したことから墓壙ではないかと思われる。ただし、その他の副葬品や供献品と考えられる遺物の出土はなく、土器の小さな破片数点の出土にとどまった。

竪穴住居跡は全部で６基を確認した。いずれも奈良時代から平安時代のものと考えられる。比較的良好な状態で検出されたのはＳＴ１２４１で、床面からは土圧で潰れてはいたがほぼ完形の須恵器の坏や、植物の種子が入った赤焼土器の小型の甕など数十点がまとまって検出された。縄文時代だけでなく平安時代にも集落を形成していたと言える。

出土した遺物は、破片が大半を占め、器種も特定できないものが多いが、大洞Ａ－Ａ′式期の土器片の類が多く、縄文時代晩期頃の土器と言えよう。弥生時代の土器については、特定できる遺物の出土は確認できなかった。須恵器や赤焼土器は縄文土器に比べてわずかの出土である。その他に小型の鉢やミニチュア壷、ヒスイ製の小玉、呪術的・祭祀的と思われる用途不明の石製品や土偶、土版など、日常生活以外で使用されたと思われる遺物も数多く出土している。

今回の調査に関しては、様々な事情が重なり、不備な点が数多くあったと思われる。報告書も記録集的なものになり、土器の分類など詳細な分析までには至らなかったのが実状である。しかし、縄文時代晩期～弥生時代初頭及び平安時代の貴重な遺跡であり、また貴重な出土資料であるため、今後の研究や調査に生かされることを願いたいと思う。なお、平成８年度調査で出土した遺物について、弥生時代のものと考えられる壺２点を含め数点を図版として掲載した。

報告書抄録

ふりがな	はなのきいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	花ノ木遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	河北町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編集者名	今田史明
編集機関	河北町教育委員会・河北町埋蔵文化財調査委員会
所在地	〒999-3511 山形県西村山郡河北町谷地字みどり町3-2 TEL0237-71-1111
発行年月日	西暦２００１年3月３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積m²	調査原因
はなのきいせき 花ノ木遺跡	やまがたけん 山形県 にしむらやまぐん 西村山郡 かほくちょう 河北町 おおあざよしだ 大字吉田 あざはなのき 字花ノ木	06321	448	38度 26分	140度 19分	19970728 ～ 19971211 19980420 ～ 19981028 (現地調査期間)	2971.1	工業団地造成事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
花ノ木遺跡	集落跡	縄文時代 晩期 平安時代	土壙・墓壙 溝跡 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 など	縄文土器・小玉 石器・石製品 土師器 須恵器 赤焼土器　など	・墓壙と考えられる土壙の底部より朱・玉の出土 ・平安時代の住居跡の確認

図　　版

図版1

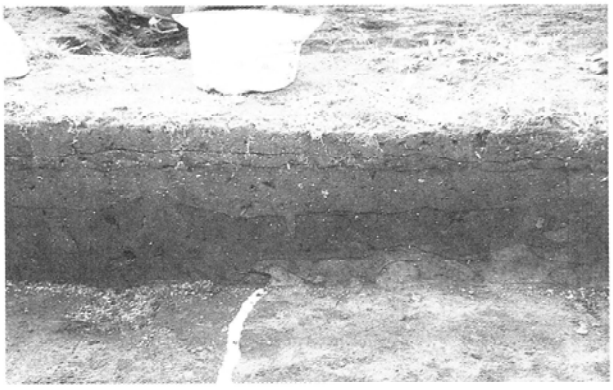
調査区近景（南西から）

調査区北半部南～南半部

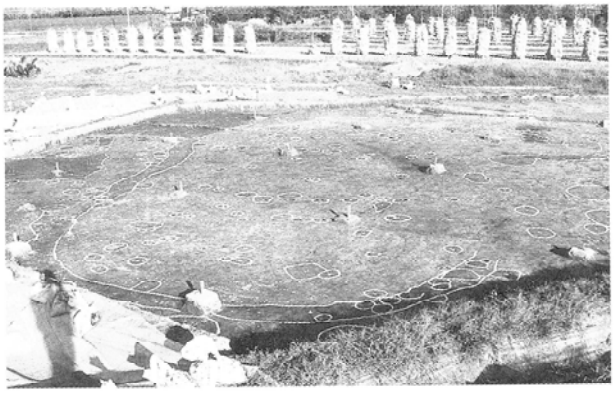
グリッド杭設定（南から）

安全祈願式（97年）

現地説明会（98年）



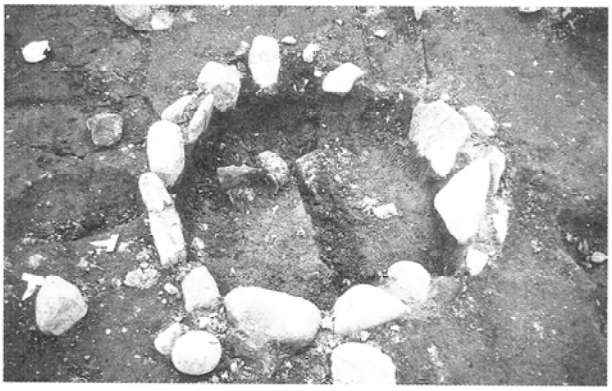
基本層序（東から）



遺構検出状況（西から）

遺構検出状況（西から）

図版２



ＥＬ９９７検出状況（北から）

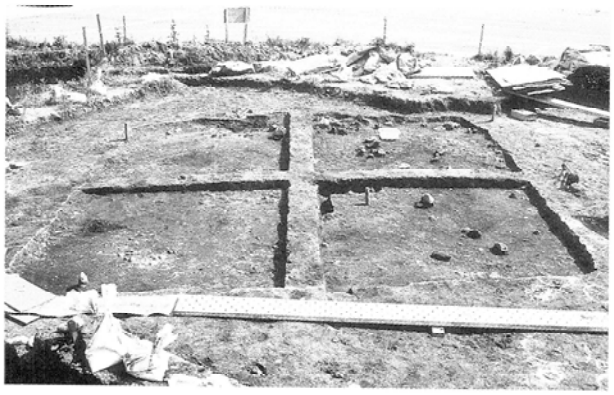
ＳＴ１０５精査状況（東から）

ＳＴ３８０精査状況（東から）

ＳＴ１１７３精査状況（北西から）

ＳＴ１３０精査状況（南西から）

ＳＴ１３０内ＥＬ検出状況（西から）



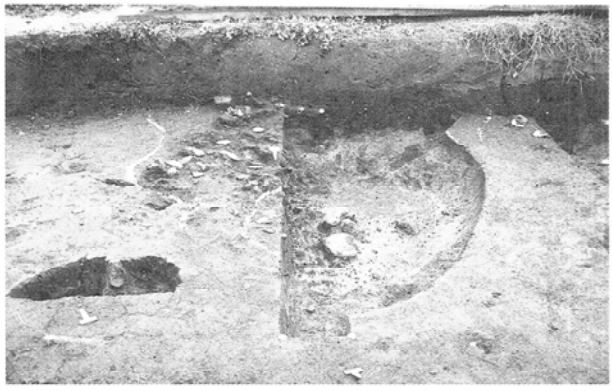
ＳＴ１０６０精査状況（北東から）

ＳＢ１３５８精査状況（北西から）

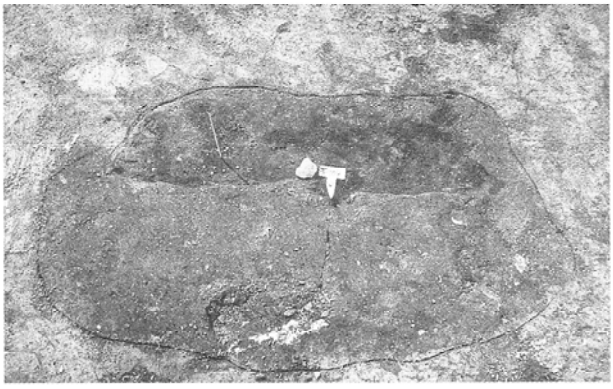
ST1241遺物出土状況（東から）

ST1241完掘・EL検出状況（南西から）

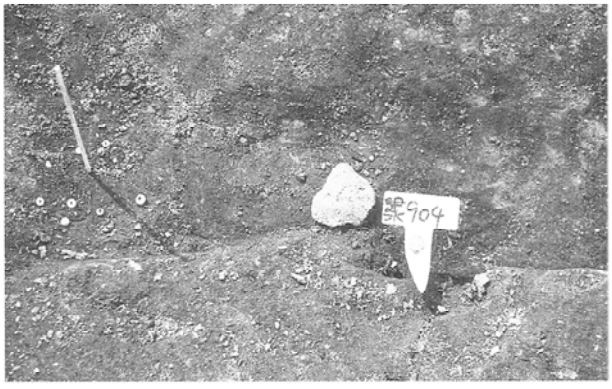
SK28内土器出土状況（東から）



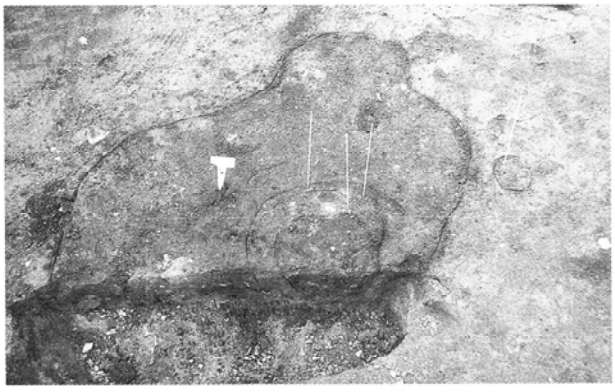
SK147精査状況（北から）



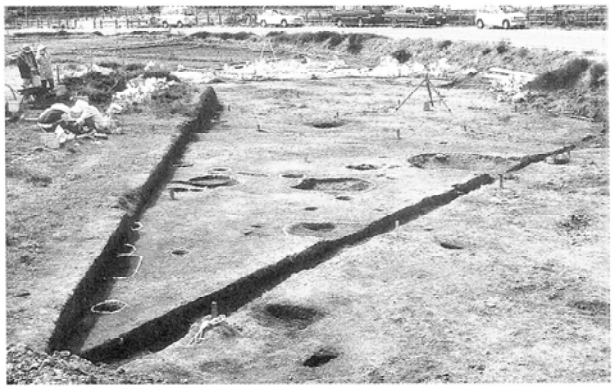
SK904精査状況（北西から）



SK904遺物出土状況（北西から）

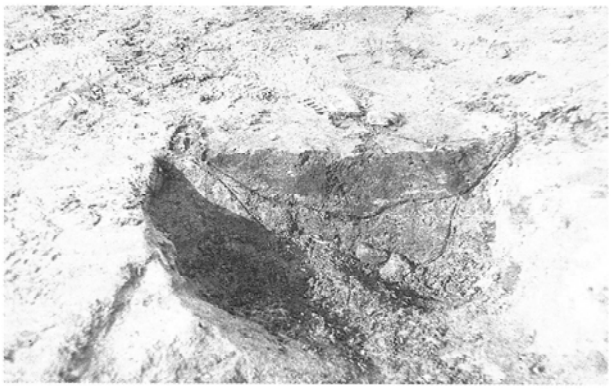


SK907精査状況（南から）



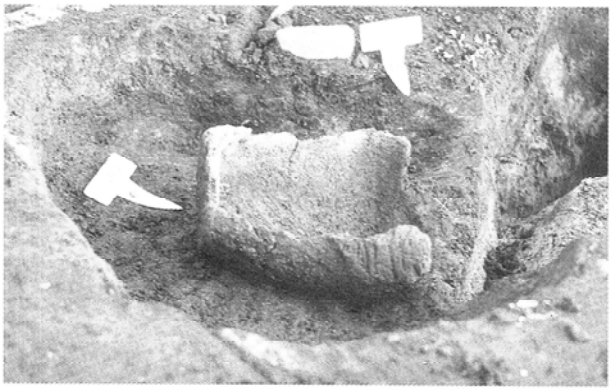
墓壙群全景（北から）

図版 4

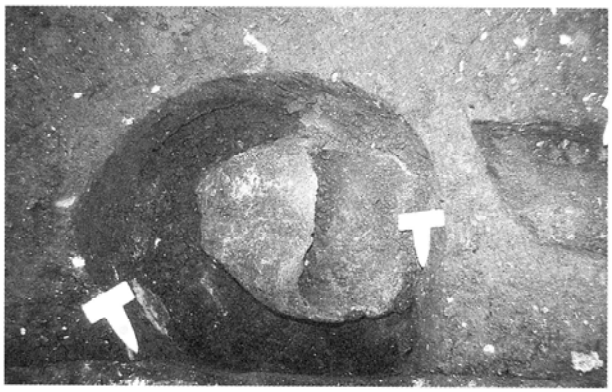


SD300ベルト断面（南西から）

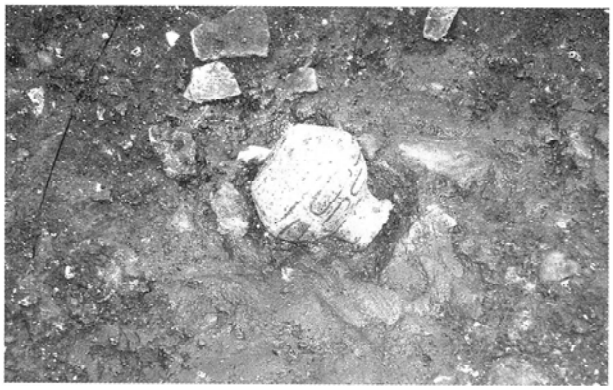
SD923ベルト断面（南から）



深鉢（RP82）出土状況（北西から）

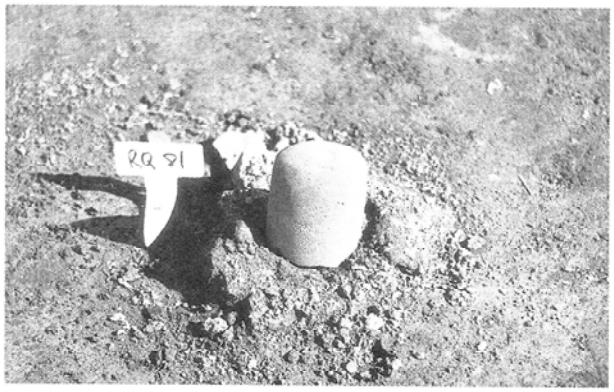


深鉢（RP441）出土状況（西から）



小型壷（RP417）出土状況（西から）

土偶（RP386）出土状況（北から）

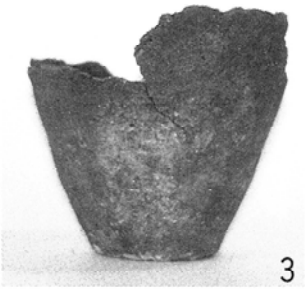


磨製石斧（RQ81）出土状況（南から）

石棒（RQ329）出土状況（東から）

1

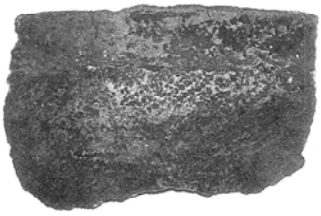
2


3

4

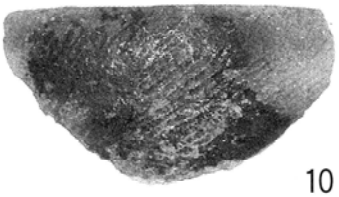
5

7


9

6

8


10

11

12

13

14

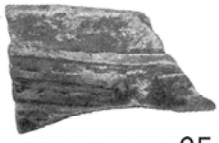
15

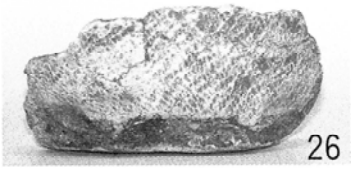
16

17

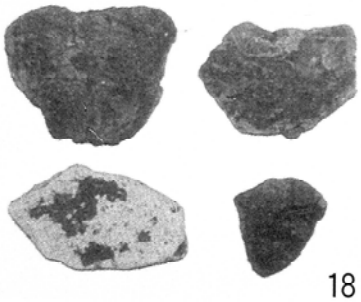
27

24


25


26

図版 6

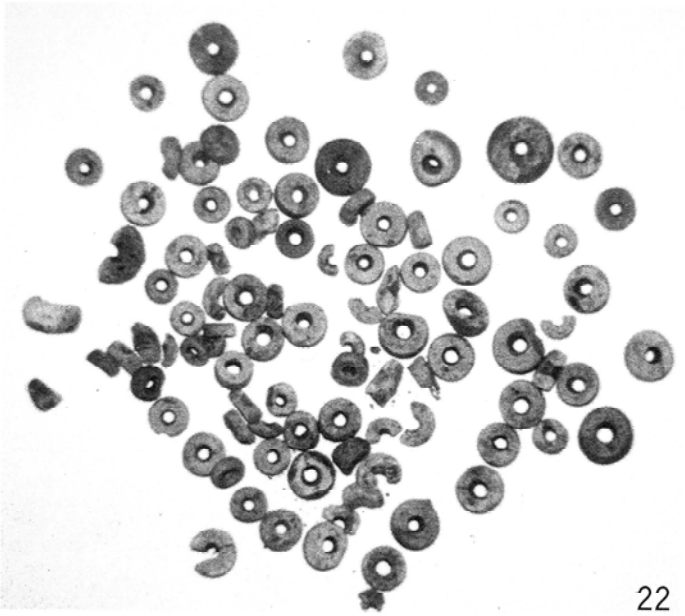


18

19、20
(1：1)

23
(1：1)

21



22
(1：1)

31

30

29

28

32

33

図版 8

34

35

37

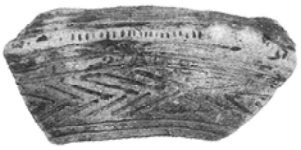
36

40

38

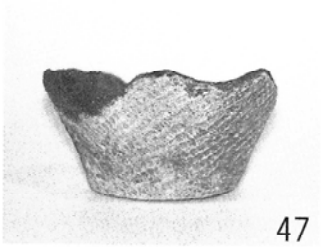
39

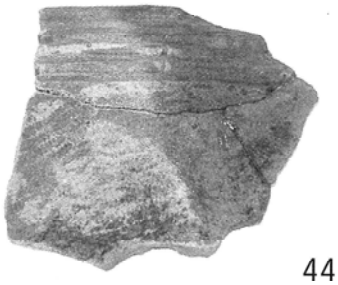
41

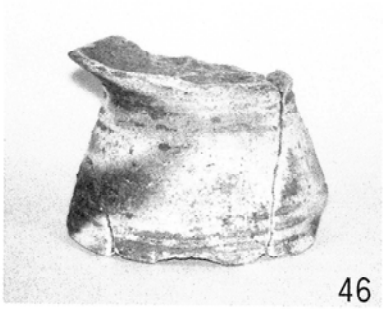

42

43

45


47


44


46

48

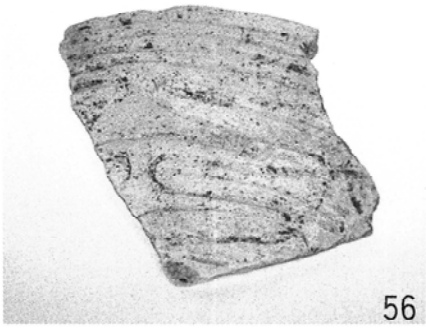
49

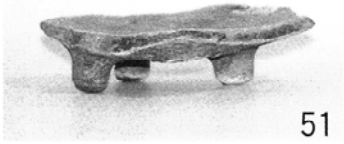
52

53

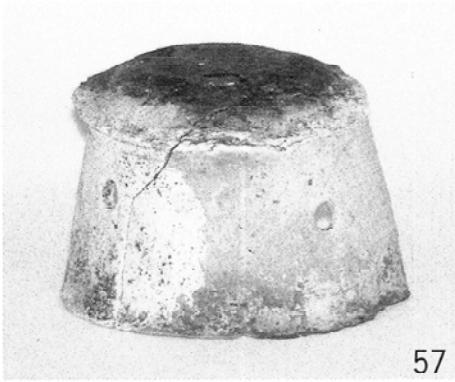
50

54


56


51

55


57

58

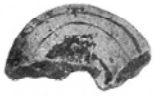
59

60

63、64

63、64

61


62

65

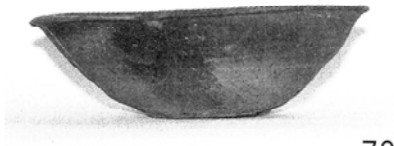
66

図版１０

67

68

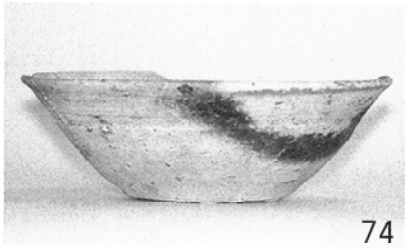
69

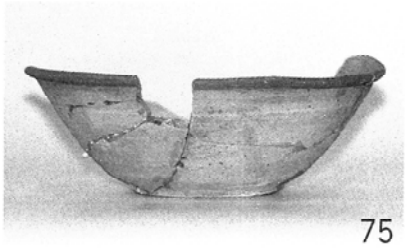

70

71

72

73

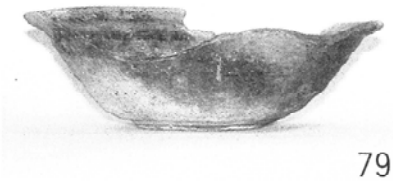

74


75

76

77

78

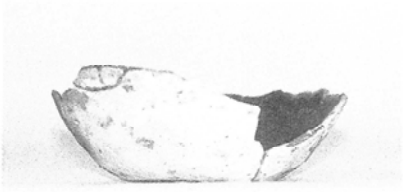

79

80

81

82

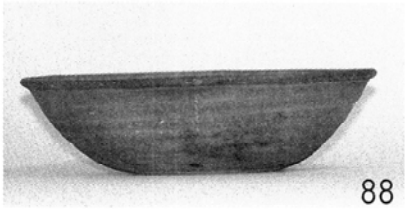
83


84

85

86

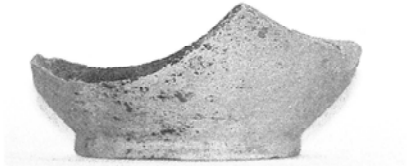
87

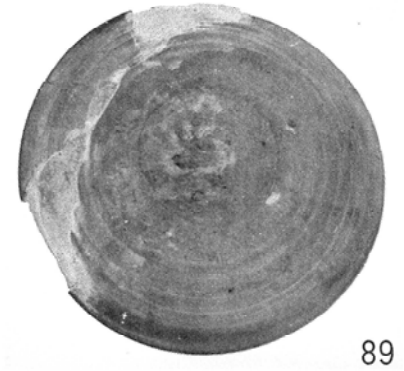

88

90

89

91


94


89

93

92

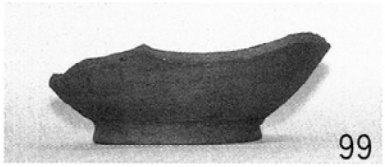
95

図版１２

96

97

98


99

100

101

102

103

104

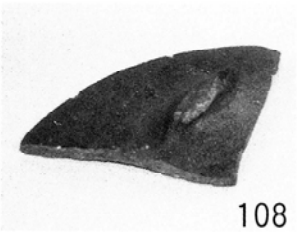
105

106

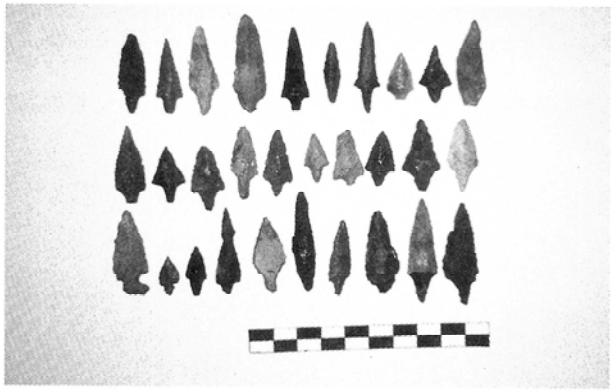
107

110

109


108

112



石鏃

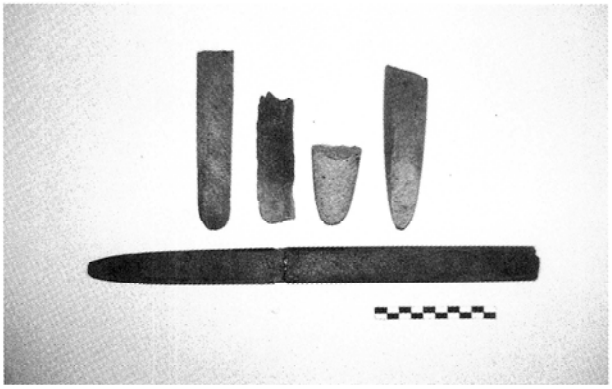
石槍

石錐

石匙

石篦

磨斧



石棒

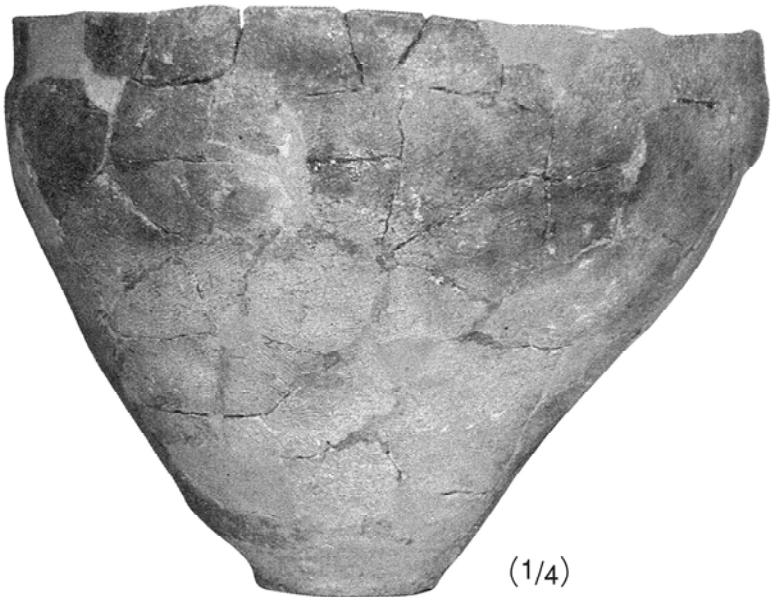
石製品

図版１４

平成８年度発掘調査出土遺物(1)

(1/4)

(1/4)

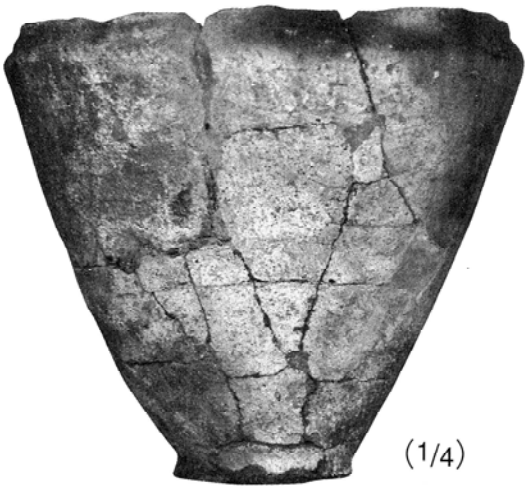


(1/4)

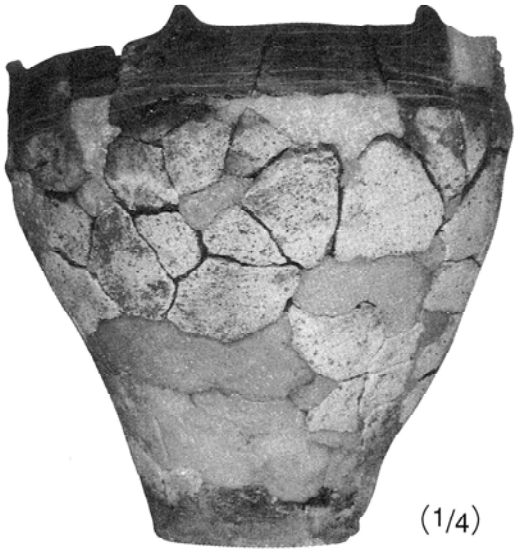
平成８年度発掘調査出土遺物(2)

図版１６

(1/4)



(1/4)



(1/4)

平成８年度発掘調査出土遺物(3)

河北町埋蔵文化財調査報告書　第4集

花ノ木遺跡発掘調査報告書

平成13年3月30日　発行

発行　河北町教育委員会
山形県西村山郡河北町谷地字みどり町3-2
TEL0237-71-1111　FAX0237-71-1110

印刷　田宮印刷 株式会社
山形市立谷川3丁目1410-1